博物館学芸員課程年報 2017
教職課程年報 2017

神戸芸術工科大学
Kobe Design University
博物館学芸員課程年報 2017
博物館学芸員課程年報2017

教員による報告・記録

博物館概論 美術館と博物館について
基礎教育センター 教授 山﨑 均

生涯学習概論 市民がつくる生涯学習の世界
基礎教育センター 非常勤講師 藤本 隆

卒業生・学生による報告・記録

博物館実習を経験して
先端芸術学部 まんが表現学科 4年 住友 千晶

美術館インターンシップを経験して
芸術工学部 ビジュアルデザイン学科 3年 篠田 真愛美

報告・記録

2017年度 博物館学芸員課程履修者数

2017年度 博物館学芸員課程運営報告

2017年度 教職課程・博物館学芸員課程運営委員会委員

『神戸芸術工科大学 博物館学芸員課程年報』に関する概要

編集後記
教員による報告・記録

この章では、本学の博物館学芸員課程のねらいや教育活動、また博物館学芸員課程担当教員の研究活動などを報告します。
博物館概論 美術館と博物館について

基礎教育センター 教授 山﨑 均

1.博物館と学芸員の基礎知識

本学の博物館学芸員課程を履修する学生が最初に出会う講義は「生涯学習概論」と「博物館概論」という必修科目である。今日では、実に多彩なコレクションを持った美術館と博物館が社会の様々な場面で重要な活動を展開しているため、博物館そのものについての基礎的知識を適切に理解しておくことは極めて重要である。さらにそれらの博物館活動においては、学芸員と呼ばれる専門的職員たちがその中心的な職務を果たしている。彼らは日々、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する業務を博物館において行っている専門的職員である。博物館の基礎知識と博物館という場ではとくに学芸員に関する専門性の基礎的能力を養うことをねらいとして「博物館概論」は、「生涯学習概論」とともに課程履修のなかで、まず学修すべき単位科目となっている。いわば、博物館に関するあらゆる活動の基本知識、その活動を支える専門的職員である学芸員が常に損りどころとしている重要な知識とコンセプトを網羅的に学ぼうとするときに必修科目となっている。博物館学芸員課程においては、1年次において「博物館概論」と「生涯学習概論」を履修した後、2年次以降、博物館各論にあたる必修科目を下記のように順次修得し、さらに学芸員に必要な教養を深める関連科目計8単位を4年次までに修得する。

□1年次
博物館概論（2）・・・・・・・・前期
生涯学習概論（2）・・・・・・・・後期
□2年次
博物館経営論（2）・・・・・・・・前期
博物館資料論（2）・・・・・・・・前期
博物館資料保存論（2）・・・・・・後期
□3年次
博物館情報・メディア論（2）・・・・前期
博物館展示論（2）・・・・・・・後期
博物館教育論（2）・・・・・・・後期
□4年次
博物館実習（3）・・・・・・・・通年

(*) 内の数字は単位数を表す。

このように博物館学芸員の仕事を現実で実際に体験的に学ぶ貴重な機会である課程履修総仕上げとしての「博物館実習」に至るまでの4年間を通じて、計画的かつ段階的に、博物館の諸機能と学芸員活動のミッションについての理解を深めつつ、履修学生は博物館に関する必修科目と本学が独自に設定した履修科目の内容と取組みを順次紹介していくこととしている。課程履修の学生や履修を希望する学生にとってはその科目履修の意義を深く理解するための一助としていただけることである。また、最近の博物館の新しい動向として、時代の変化と地域創生の流れのなかで個々の博物館活動をもじろもじするだけではなく、異種の博物館どうしの交流や共催による展覧会の合同調査と研究を常日頃から機会あることにすすめ、その成果発表となる展覧会の共働と連携を図り、コレクションの相互寄借と共催研究による広域的、多面的な学際的活用をめざす展覧会の企画が著しく活発になってきている。こうした新しい時代の状況を鑑みて、博物館学芸員に求められる資質も多様化、高度化し、博物館をこれまで以上に社会教育と生涯学習の場として活用する人々の学習意欲に応えるために、さらに専門性を深めることはもちろ んのことだが、社会人としてのコミュニケーション能力の向上、ファシリテーター的な役割を意識した人格的向上と幅広い教養が博物館学芸員にいまだ以上に求められている。学芸員に期待されているものも時代とともに変化を遂げているのである。したがって「博物館概論」においては、博物館に関する基礎的知識の理解に努め、博物館に固有の専門性の基盤となる能力を養うとともに、一方では社会人としての常識と教養を常に深める態度と人格的向
上に努めることの必要性を強く訴えている。一方において、博物館に期待されているもの、時代の動向を冷静に分析し、博物館を基礎づける博物館学の最新知見をふまえて、次世代を視野に入れて時代をこえていく博物館という機関に寄せられる社会的信頼、その専門的活動を司る学芸員の能力を不断に養うことは一貫して変わらないといえる。

2. 「博物館概論」の内容とミッション
「博物館概論」においては、その中核となる博物館そのものを専門的に研究する博物館学という学問分野が存在し、さまざまな学術的な知見が歴史的に蓄積されて専門的な調査研究がおこなわれていることをまずは学ぶ。博物館学も様々な分化、博物館についての歴史的研究をはじめ、博物館が社会のなかでどのように意識されて存在してきたかをめぐる、教育学、社会学、倫理学、哲学者、人類学、美術史学、美学、社会経済学など、自然・人文科学の学問分野ごとに極めて多種多様なアプローチが成立している。博物館学は単なる博物館の分類学であり、学芸員の職能はコレクションの解説と保護だけであると思われてややもすれば博物館学は軽んじられてきたきらいが過去にあったが、今やそうした表面的な理解に留まっていてもはや現代の博物館のミッションと意義を適切に捉えることはできない。博物館が果たすかけがえのない活動の重要性、博物館のミッションを自覚し、その活動を分析し社会と文化的な創造と発展とともに理解し、再発、再認識することは、現代の社会文化を深く解明するうえでは必須となっている。こうした逆転や変化がなぜ社会的に生起してきたかにも関心を向けながら、履修生は博物館学の成果を学び、博物館とは何かを同時に並行に整理して、具体的な事例とともに学ぶこととなる。博物館学の成立と歴史的な展開、博物館学的目的、方法と学問的構成をそれぞれ詳らかにし、博物館とは何かを身近な生活圏の中から捉え、焦点化することが極めて大切である。履修生が果たすべき役割は博物館の理解を深め、自分たちの作品や仕事のコンセプトを鍛えて深めるこ

改めて意識し、それらの経験と現在の博物館とを比較しながら、自分が博物館学芸員になった立場を想定して積極的に博物館を訪問することをすすめている。また同時に作家がどのように博物館を自分の作品創造のヒントに役立ててきたかについても注意を促している。たとえば、岡本太郎が縄文土器の美を見抜いてその凄みと独自のクオリティを社会に訴えたきっかけとなったのは博物館や大学の縄文土器のコレクション群であり、写真のクローズアップによる部分的な造形美の強調であった。そのことにより日本美術史は一変し、縄文時代についての知見は考古学的な次元とともに美学や美術史的なアプローチが可能となった。岡本太郎の代表作《太陽の塔》（1970年）は人々の共感を呼び、大阪万国博覧会の跡地に保存が決定されて、かけがえのない日本文化のひとつ時代の象徴として、世界遺産登録への申請の気運さえ生まれている。また明治時代の日本の近代洋画の黎明を担った先駆的画家である高橋由一は油彩画の物質的堅牢さに注目し、油絵の記録性を活用して森羅万象の多彩な文物を絵画で記録保存して紹介する独自の博物館（ミュージアム）を発表し、「螺旋展画閣（らせんてんがかく）」と名づけた。螺旋形のかたちの建物に油絵を並べて、多種多様な風物を文化財として収集・記録・保存・公開・活用するというユニークなものだったが未完の幻のプロジェクトに終わっている。しかしその意図は社会性のある博物館（ミュージアム）の先駆的発想として評価されている。（現在、四国の金刀比羅宮の高橋由一館には、そのときに由一が常に念頭においていた油絵がどのようなものであったかを想像し、理解するうえで有意義な高橋由一の絵画コレクションがある）。

このように歴史的に、作家たちの作品創造とその発想は、博物館という環境と密接であり、文化史的に深く関係している。

本学では、作品コレクションの鑑賞の機会を社会的にも文化的にも意義あるかたちで提供する博物館（ミュージアム）活動について、歴史に学び、博物館学に学んで課程履修の４年間の学修に実践的に取り入れていくことが求められている。各学生の関心と専門、専攻コースで取り組むべきテーマを発見し、自分の作品や仕事のコンセプトを鍛えて深めるこ

博物館概論 美術館と博物館について

- 2 -
3. 博物館の多彩な活動を学ぶ

博物館に強い関心を抱き実際に自らの人生に活かして博物館の意義と経験を最大限活用した人々や芸術家が歴史的に数多く存在してきたことをふまえ、自らも博物館学芸員課程履修の4年間のなかで、様々な機会を捉えて博物館に足を運ぶことを促している。「博物館概論」の講義内容と関連づけながら、展覧会をじっくり鑑賞し、さらに学芸員が企画し、様々なボランティアや支援サポーターと協働している多彩な教育普及プログラムへの参加も同時にすすめてい refute. 主に課程の2年次及び3年次生に参加を推奨している美術館インターンシッププログラムは、課程講義の予習・復習の時間をより充実させる貴重な機会だけでなく、現場の学芸員に接しながら学芸員の仕事の一端を体験し、学生の人格を磨き、社会性を身につけるきっかけがたたの場となっている。学芸員に必要な専門知識との関係において、身近に存在する博物館に通い、実際に学びながら博物館についての知識を豊富に構築することができれば、課程学修の成果は極めて実りあるものになる。このように「博物館概論」において美術館インターンシップ活動を早期に紹介し、博物館について大学や一般のボランティア、NPO、サポーターとの連携プログラムがあるような意味を持ち続けるかに関心を向けてもらえるように近接なところにある博物館プログラムの内容を例として説明している。博物館学芸員と博物館ボランティアの意見に接し、実際の活動に参加することも有意義であるが、まず「博物館概論」によって博物館の活動全般を理解しておくことが求められる。博物館に関する概論レベルの理解を基本にして博物館資料の取扱いの重要性を実地に学芸員から学ぶことは、課程履修を各段に実り豊かなものにするだけでなく、学芸員が社会人として必要な教養と基礎的なコミュニケーション能力などの常識的な素養を身につけているさまを理解することでもある。このような観点から「博物館概論」においては、学生がより豊かな博物館経験を積んで履修の意義を強く自覚して取り組むように、「博物館概論」では、博物館インターンシッププログラムをはじめ、学芸員の専門性の発露として多種多様な博物館活動を学ぶ。

4. 博物館の定義について

「博物館概論」において、最も詳しい説明を必要とし、様々な質問が寄せられる内容は、おそらく博物館とは何かという博物館の定義に関するものであろう。このテーマは、博物館学が継続的に取り組む中心的テーマであり、博物館学の黎明期から、時代ごとに更新されて再定義されてきた博物館の定義の変遷を解明しようとしてきた。博物館の定義は、時代的な時代要請からみて存在しているものである。つまり博物館の定義には、そのときどきの社会が博物館に求められる理想の姿が映し出されている。その定義の歴史的な変遷を辿りその変化を時代ごとに分析することから、博物館に関する様々な問題の解決を図り、将来への課題と展望を見出す試みがみとめられている。博物館がどのように自律的に自らの活動を評価して改善しているか、そして博物館とは何かについて人々とともに考えようとして博物館の存在意義をどのように社会に訴えてきたかについて、その歴史を学ぶことは大変重要と考えている。こうした観点から、博物館学の現代的な展開を理解しながら、戦後に成立した現行の博物館法をはじめとする関係法規の成立以来の法律改正の動きについて、近代日本の社会変化と文化史の展開の流れのなかで理解し、改めてその歴史を展望して将来の博物館活動に活かす視座を身につけることも、課程履修の意義となる。このように「博物館概論」においては、学生がより豊かな博物館経験を積んで、履修の意義を強く自覚して取り組むように、「博物館概論」では、博物館インターンシッププログラムをはじめ、学芸員の専門性の発露として多種多様な博物館活動を学ぶ。
履修生は今まで無意識的に使ってきた博物館や学芸員という存在について、その根拠と意味を問われることになり、それらを改めて博物館法のなかに見出すことになる。博物館を定義するとき、筆者は基本的に博物館法のもとに説明し、博物館と図書館との違いと関係、博物館の類縁機関との違いを含めて概説している。とくにデータベースやスマートフォンなどによって社会の情報化がすすみ、博物館(M)、図書館(L)、資料アーカイブ(A)の三種のMLAの機関連携が求められ、博物館に期待されているものがこうした機関連携のなかではっきり姿を現す。履修生はそうした社会的な機関連携のネットワークの一部として活動する博物館の現代的な展開を通じて、まずは現実上の博物館の基本的な知識と学芸員について理解し、その専門性の基礎となる能力を「博物館概論」を通じて養うことが求められている。

1946年創設のICOM（国際博物館会議、International Council of Museums）は、様々な種類のミュージアムの進歩とその発展を目的に国際的非政府組織として活動しているが、その傘下にあるICOMOM（国際博物館学委員会、International Committee for Museology）は博物館学の目的、方法、構成について国際的な共通理解と課題追究の調査研究とその成果を試作的にまとめている。博物館とその専門職域の変化を受けて、異分野の博物館どうしが議論する基礎となる共通言語の確立とそのヴァージョンアップのためのプラットフォームづくりをすすめている。

5. 美術館と博物館

美術館という言葉は、普段から日常的に使われているが、美術館、動物園、植物園、水族館、昆虫館などをいわゆる法律的に「博物館」として扱うことを、「博物館概論」を学んで初めて知ったという学生はとても多い。こうした驚きから出発して、日本の博物館の「博物館」の歴史と現状を、日本と海外のそれぞれの博物館を例示しながら学ぶ。これにより、それぞれの博物館の学芸員の仕事も多種多様で社会の要請に応じて、美術館独自の使命、自然史や人文系博物館の使命、そして生物を飼育し、生物多様性保護や環境保護の社会的要請にも応じて活動する動物園や水族館などの使命など、館種ごとに専門化と高度化を遂げているさまを詳細に学ぶことが可能。こうした観点から、ICOMの活動、その高邁な理想とミッションはそうした国際的に専門化と高度化を遂げて変貌しつつある博物館の活動全体を深く理解するための国際的な共通言語確立の必要性を訴え、そして社会の要請に応える博物館を維持発展させることに気づかせている。諸外国と日本における博物館の歴史と現状を学びながら、あわせてそれぞれの社会と文化のなかで博物館学芸員に期待されていることは何かを理解することが期待されているのである。日本では文化財保護法や世界遺産に関する各種の法律を博物館法の関連法令として位置付けて理解することが美術館でも博物館でも必要である。博物館を運営するには国立博物館の法律的根拠、重要文化財、文化財保護法、指定管理制度の理解も欠かせない。さらに博物館法上では博物館類似施設に該当する施設や機関などの法的区分についても学ぶことが可能。最近では、まちづくりのなかで、地域そのものをミュージアムや博物館に見立て、そのネーミングの魅力を活かしたプロジェクトや文化政策がさかんである。そこで「博物館概論」では、こうした取り組みを博物館法が定める博物館の定義（類縁機関との違いを含む）、種類（館種、設置者、博物館法上の法的区分、博物館の登録制度など）、目的、機能との関係から考察し、博物館法に定めた本来の博物館の使命を再認識し、美術館と博物館の違いや共通点にも注意を促している。美術館では作者の著作権、創作当時のオリジナルの状態を想定しながら、作品の美的価値を保つために必要な最小限の大きさやデザインへの配慮を必要とする。博物館では資料の歴史的な意味を汲み取るキャプションと説明パネルのデザインについて美術館とは異なる独自の視点がみられる。美術館と博物館が共催する展覧会やまちづくりのプロジェクトも増えて、美術館と博物館のそれぞれの個性とその独自性について認識を新たにすることも多くなってきている。

「博物館概論」では、学芸員の使命、定義、役割について、博物館法をふまえて館種ごとに適切に理解できるように努め、学芸員に必要な専門性の基礎的な能力を養い、社会人として教養を一層深める努力を学生に期待している。
生涯学習概論 市民がつくる生涯学習の世界

基礎教育センター 非常勤講師 藤本 隆

1 はじめに

私たちは、学校教育や受験勉強の影響か、学習と言え
ば、教えられる内容は事前に、教師や専門家により決定さ
れ、生徒は一方的に聞き、学ぶ。宿題や課題が出され、眠
たい目を振りながら暗記したり、レポートを作成・提出
し、時おり、テストを受け、厳しい評価を受けるというス
タイルをイメージしがちである。

しかし、この小論で取り上げる事例も、そういった多く
の方々が抱く学習イメージとは、すいぶんと違うもので、そ
の多くは生涯学習の実践事例である。

学芸員養成課程の必修科目の一つである生涯学習概論
は、もともととは社会教育概論という名称であった。社会教
育法第9条で定められている通り、博物館は図書館、公民
館と同じく社会教育施設の一つであり、社会教育の考え方
や方法論が、学芸員の基礎的知識・考え方として必要とさ
れていることに基づいているものである。

1997年の博物館法施行規則改正で、生涯学習概論という
名称に変わり、学校卒業後、成人になった後も含めた生涯
にわたる学習を支えるという視点が強になるとともに、博
物館が学校や公民館などの他の社会教育施設と連携・協働
するという視点が強化された。

今までも、社会教育施設である博物館で行われる学習
は、学校教育型の学習ではなく、社会教育の方法論をベー
スに展開されてきた。そして、博物館法の改正等を経た後
も、学校型の学習とは違う学習スタイルが、博物館がい
わゆる社会教育施設では、さまざまな展開されている。

博物館や美術館に、私たちは「〇〇展」を見に行ったり、セミナーや講演会の開催が行われたり、博物館が主催の
観覧会に参加するなどの形で訪れる。これも、立派な学習
であるが、学校教育で身につけてしまった学習イメージと
は、かなり違う。

この小論では、さらに、市民自身が学ぶ場をつくって、
市民どうして学びあうような、もう一つの学びについてご
紹介したい。
などの分野で活躍するプロフェッショナル、日ごろ様々な分野で働き多彩なスキルを持つボランティアスタッフなど、総勢約200名のチームで運営されている。

【主な活動内容】

①渋谷区を中心とした公開講座（「シブヤでまなぶ」）
「シブヤ大学」は校舎がなく、街をまごもキャンパスにみて、おしゃれなカフェやレストラン、花屋、病院、お寺や神社といった街のあらゆる場所を“教室”にして、シブヤ全体を“まなびの場”としている。
別表に、実際に実施された講座をいくつか取り上げると、こういった講座が16年度には84講座開催され、延べ1924名が参加している。

②参加者・同士の自発的な活動のサポート（ゼミ・サークル）（「シブヤであそぶ」）
「シブヤ大学」では、「ゼミやサークルを立ち上げて、街に人が集まる“あそび”的場をつくる仲間づくり”にも重点を置いています。ホームページ上には、公認サークルが紹介されている。

③まちづくり活動と情報共有（「シブヤをつくる」）
「シブヤをつくる」活動は、企業やNPO、町内会や自治会など、街に関わるさまざまな団体と協働しながら、地域の活性化や地域の課題解決を主な目的としたまちづくりプロジェクトを立ち上げ、それぞれに活動目標や期間を設定して活動している。「シブヤ大学」のホームページには、家族やマイノリティ、防災、文化、福祉のほか、幅広いテーマごとにプロジェクトが紹介されている。

④他団体姉妹校活動サポート事業
この「シブヤ大学」の先例として、姉妹校として発足した大学には、「京都カラスマ大学」（京都府京都市）、「大谷大学学園」（愛知県名古屋市）、「札幌オオドリ大学」（北海道札幌市）、「ひろしまジン大学」（広島県広島市）、「東京にしがわ大学」（東京都西側地域）、「福岡テンジン大学」（福岡県福岡市）、「琉球ニライ大学」（沖縄県本島および周辺離島）、「サクラ島大学」（鹿児島県）の8校がある。「シブヤ大学」は、これから姉妹校に対する助言支援も行っている。

【「シブヤ大学」の特徴】

①受講料は無料
すべての人に開かれた学びの場を目指し、「シブヤ大学」では、授業料は無料としている。（材料等が必要な講座を除く。）講座料、入学料はかからない。受講者の層は、20～30代が全体の約8割を占めるが、70代まで幅広い。

②多様な講師陣、教室は渋谷区内
「シブヤ大学」は、「学生は先生にもなる、“教え”と“教わる”を自由に行き来できる。いわば、新しい“共育”システムです。」と説明している。この特徴は、広く、社会教育や生涯学習の実践事例に見られる特徴である。
実際、講座の講師は大学教授から、音楽プロデューサー、モノづくりの達人、有名料理店の若女将、NPOスタッフから学生や主婦まで、有名無名の講師が勤めている。
③地域に根ざした講座
講座内容は、三味線などの教養講座、環境問題、「明
治神宮の森でどんぐり拾い」、区内のものづくりの現場
まで地域に根ざした講座が幅広く実施されている。

（2）「シニア自然大学校」
「シニア自然大学校」は、平成6年に「大阪自然環境保全
協会」内に、自然観察のアドバイザー養成を目指し、大阪シ
ニア自然大学を開講したことからできた組織で、市民が自
ら創り上げた高齢者大学ともいえる。
名称からすると自然を愛好するシニアだけを対象として
いるように見えるが、大学内には子ども教育部門もあり、自
然のほか歴史や文化など幅広く学習機会を提供している。
【活動の目的・趣旨】
環境NPOとして、平和で豊かな社会の実現をめざし、自
然環境教育と社会文化活動を積極的に行うことを目的に発
足。2002年には、特定非営利活動法人格を取得している。
2016年度に認定NPO法人の認定を受けている。
【予算規模】
2016年度決算額…95,771,549円
収入の内訳は、会費が1割余りのほかは、講座の受講
料収入等や自治体・企業等の受託事業が大半を占める。
【組織】
会員数は1700名で、組織は、自然教育部門、CITYカ
レッジ部門、調査研究部門、地域貢献活動部門、涉外・
広報部門、事務局、特別行事などの部門に分かれてい
る。各部門で実施されるセミナーや事業のプログラム作
成、講師や指導者の依頼・確保、広報等は、全てボラン
ティアスタッフにより運営されている。
【主な活動内容】
①学習
オー自然環境教育事業
「シニア自然大学校」の入門的講座で、多くの方は、こ
こから自然について学び始める。学習にあたっては、座
学、野外学習や宿泊研修により自然全般について学習す
る。なお、現役社会人の学習参加を可能とするため、夜
間/昼コース（2年制）も設けている。
オー社会文化普及啓発活動
大阪教育大学後援を得て2007年から開講。主な教室
は大阪教育大学天王寺キャンパスで、講師陣も大阪教育
大学の教員に主に協力を得ている。
【カレッジ本科】
1年次は音楽、美術、歴史、文学（古典、近代）、自然、
環境等を広く学び、2年次は歴史、文学（古典、近代）、芸
術についてさらに深めるというカリキュラムである。
オー子どもの健全育成事業
次世代を担う子どもたちに自然の大切さを教え、自然
に親しむ楽しさを実感させることを目的に、「ジュニア
自然大学」、「こども自然教室」などを開催している。
地域で身近な公園や公共施設を利用して、多種多様な自
然体験活動、ネイチャーカラフト、炭焼き見学、伝統遊
び、田んぼや畑で農事体験を行っている。
②調査研究事業
12の研究科と3の調査会（總勢481人）はそれぞれが
自律的に多様な調査研究事業を展開し、「シニア自然大
学校」の中核的な活動となっている。大学や研究所と協
働して研究調査を行うなどの事業にも取り組んでいる。
③社会貢献活動
淀川の清掃、鶴殿のヨシ刈り、森林の間伐作業、棚田保
全等の社会貢献活動を、随時各地区で実施するため、一般
の方のボランティアを募集中、環境保全活動を行っている
ほか、各種教室・セミナー事業なども受託している。
【「シニア自然大学校」の特徴】
①学習⇒調査研究⇒社会貢献活動のステップアップ
「シニア自然大学校」では、会員の多くはセミナーや
イベントなどに参加することから活動を始める。そして
調査研究活動、さらに社会貢献活動へとステップ
アップしていくことをめざしているが、その割合は高く
はないが、スタッフの方々の悩みとなっている。
②高齢者大学を市民の手で担う意思を持つ
大阪府の財政再建のため、大阪府の高齢者大学（「大
阪府高齢者大学アクティブシニア講座」と「シルバーア
ドバイザー養成講座」）は廃止されることとなった。こ
の時、継続開講のための受皿として設立された特定非営利活動法人の中心的な組織となったのが、「シニア自然大学校」である。

多くの自治体で、高齢者大学は自治体直営か外郭団体により運営されている例が多い中、これを市民の手で担おうという意思を持つ「シニア自然大学校」のような団体が中心となり、今では受講料収入だけでなく大阪府高齢者大学は運営されている。

3 市民がつくる学びの意味と専門性・妥当性

「シブヤ大学」、「シニア自然大学校」の2つの市民がつくる生涯学習の事例を紹介したが、みなさんはどのように感じたであろうか？「エネルギッシュな人々中心にやってる特別な例」、「おもしろそうだけど、自分は学生として参加したい」といった感想を持った方もいるかもしれない。

ここで、市民自身が学ぶ場をつくって、市民どうしで学びあう一つの学びの意味について、戦後の日本の社会教育の基盤形成に影響を与えたと言われる、昭和21(1946)年7月の文部次官通牒「公民館の設置について」の「公民館設置運営要綱」をみながら考えてみたい。

(1) 教わる・利用する学びと市民がつくる学び

この要綱の中で、公民館は、「各町村に設置され、此処に常時に町村民が打ち集って談論し読書し、生活上産業上の指導を受けお互いの交友を深める場所である。」「青年団婦人会などの町村に於ける文化団体の本部ともなり、各種団体が相提携して町村振興の底力を生み出す場所」、公民館は「上からの命令で設置されるのではなく、真に町村民の自主的な要望と協力によって設置され、又町村自身の創意と財力によって維持されていくことが理想である。」と述べられている。

すなわち、公民館は「地域に根差した」「（当時の青年団婦人会などの）住民団体の拠点」でかつ「まちづくりの拠点」であること。また「住民の主体的意図によって設置される」、又「町村自身の創意と財力によって維持されている」ということが示されているのである。

(2) 専門性との相克

最後に、市民がつくる学びと専門性の問題に触れておきたい。

私たち自身が、専門家の持つ知見や判断、他者の意見や価値観を尊重し協働しながら、学ぶ場をつくり、学びを深めることができなければ、せっかくの主体的で、刺激的な市民がつくる学びの場は、独りよがりで社会的に受け入れられない場となりうる危険性も存在する。

ここ20年ぐらいの間で、日本国内でも「越後妻有アートトリエンナーレ」や「瀬戸内国際芸術祭」などが行われており、私自身、欠かさず見に行くほどこの2つの芸術展にはまっている。そこで関心を持ってみるポイントの一つが、アーティストたちと芸術の専門家ではない地域住民との間で、いかに協働が行われているのかという点である。

特に、初期の「越後妻有アートトリエンナーレ」では、祭りのように地域住民を巻き込んだ作品があったものの、いまひとつ見ごたえを感じられない作品も散見された。

ただ、優れたアーティストというのは、住民の巻き込み方を通じて芸術の専門家ではない地域住民と、地域住民と地域住民と、地域住民と芸術の専門家とが協力し、全体として芸術の作品として発表されるものである。

そこには、地域住民と専門家でのアーティストの間で初期に見られたよそよそしさや無関心ではなく、相互の信頼や尊重の姿勢が見られた。これこそが、市民がつくる学びを高めるもうひとつの鍵なのである。
卒業生・学生による報告・記録

この章では、博物館実習参加者から2名、美術館インターンシップ参加者から2名の報告を掲載しています。
先端芸術学部 まんが表現学科 4年
住友 千晶

４年生になり博物館実習を終えて、インターンシップで感じた緊張感を改めて味わいました。1年生から博物館学芸員課程の講義を受けてきましたが、実際本当に学べたと思えたのはインターンシップと博物館実習でした。今回実習先として行ったのが、「伊丹市昆虫館」でした。選んだ理由はただ昆虫が好きで美術館よりも楽しくにぎやかな場所が好きだったからです。しかし実際に実習に行ってみると、知識も自分が思っていたことが間違っていたということが多く、それ故に他の専門的な大学から来ている実習生や博物館の学芸員の方々には学ぶことが大量にありました。例えばよく道や家に出るゴキブリは汚いですが、あのゴキブリが特殊なだけに森にいるオオゴキブリは環境を整えてくれているものであり、同じ昆虫でも全く役割が違うことが衝撃的でした。最初は気持ち悪く感じていたオオゴキブリに対して実習が終わるころには赤ちゃんを産んでいたことをうれしく思えるまで感じ方が変わりました。実習をする中で一番苦悩したのが、虫のふれあいコーナーでの来館者への対応です。美術館と違いおしとやかで年齢層が高めの人よりも、年齢層の低い幼稚園児の団体、外国人観光客、小学生、幼稚園児よりも小さい赤ちゃんが主な来館者でした。歳の離れた妹や弟がいる方は対応には困らないかもしれませんが、小さい子と接する機会が少ないととても難しいだろうと思います。昆虫を乱暴に扱う子供が多くいる中で、それをどう言葉にしてどう伝えればいいのか。普段友達と話す場面で言う言葉と到底子供に伝わらないのか、普段友達と話す場面で言う言葉だと到底子供には伝わりませんでした。日を重ねることに周りの実習生がどんなふうに子供に言い聞かせているのか観察しながら日々伝え方を変えつつ一週間ほどたってようやく子供にも大人にも同時に伝わる言い回しを見つけることができました。

最後に実習とこの４年間を通して感じたのは、博物館や美術館を同時に必要だと感じるのは、誰にでも伝えられる知識とコミュニケーション能力と人に伝える伝達能力だと学びました。反省点はたくさんありますが今後同じような機会を得た時に今回思った反省した部分を解消できたと思います。

先端芸術学部 映像表現学科 4年
平井 美穂

兵庫県立美術館での博物館実習を終えて思っていることは、大学の講義で学んだ内容は全て美術館を構成している大切な要素であるが、一つ一つの要素は他の要素と複雑に結びつき、まるで連想ゲームのように繋がっているのではないか、ということです。

実習中は座学等で短期間で今までに大学の講義で学んだ内容を広くふりかえることが出来ました。また、県展補助作業やワークショップでの実習で学芸員・職員の方々、様々な専門を学ばれている実習生の方々の言論、ミュージアムボランティアの方々や来館者様、作品提出者のプロの方、様々な方と関わることが出来ました。その貴重な経験から色々なことを気付き、考え、学び取ることが出来ました。

県展補助作業の作品返却の日に、作品と作家さんという関係を近くに感じ、作品どうしを「比較する」ということについて自分なりに考える機会がありました。その時、作品を観る時に作家さんの思いや作品の背景を知りたい、考えたいと、人に教わったからではなく自ら強く思う瞬間があり、今まで以上に美術や美術館に関わることが楽しいと感じるようにになりました。この気持ちを今後忘れず持ち続けたいと思います。

座学でも「作品の調査をする中で作家さん自身についてもわかってくることがあり、それが新たな発見に繋がることもある」と教わりました。この二点によって「作家さん自身について深く知る、知りたいと思う気持ちがある」と、作品同士比較することが出来、調査が進むのだろうと思いました。その探索心が必要だからこそ大学の講義で先生は何度も専門分野を持つことが重要だとおっしゃったのだろうと気づきました。

博物館学芸員課程での最後の課題である架空の展覧会の企画に取り組んだなかで、上記の気づきや実習での多くの学びのお陰と感じることもあり、非常に充実した実習期間だったと改めて思っています。

最後に、実習の皆様及び先生方、実習に際してお世話になった方に感謝致します。
芸術工学部 ビジュアルデザイン学科 3年
篠田 真愛美

今回、横尾忠則現代美術館でインターンシップを経験し、学んだことがたくさんありました。私がインターンシップに申し込みをしたのは、4年次に受講する博物館学芸員課程の座学講義だけでは理解が難しいことを身をもって学んだと感じました。また私は以前から横尾忠則さんの作品が好きで、横尾忠則現代美術館へ訪れていたので、もっと作業を通して作品への理解を深めたいという動機もありました。

横尾忠則美術館では文字起こしというインタビューの記録だけでなく、作家の資料を整理把握するために1点ずつ確認、カメラに記録する一次調査という作業を主に体験させていただきました。また実際に授業の中で学んだ状態調査書作成の作業を手に取って整理する作業なども体験させていただきました。その中でも私が一番驚いた作業は、横尾忠則さんの10年以上前から今までの日記を全てスキャンし、年代順にファイルでまとめていく作業です。作家のどんな小さな情報でも大切な資料になるとは教わってきましたが、まさか日記までを収集しているとは知らなかったので一番驚きました。またそのような作業を通して、横尾忠則さんの作品以外にも趣味、思想などを学ぶことができ、とても有意義な経験になりました。美術館職員の方とても優しく、時に厳しく対応してくださり、安心して作業をすることができました。

芸術工学部 ビジュアルデザイン学科 3年
森 亜香音

私が美術館インターンシップを希望した理由は、以前初めて自分の作品を展示したときに満足いく展示ができなかったので、次はどうするのだろうかと効果的な展示ができるのかを知りたいと思ったからです。

今回のインターンシップでは、実際に作品の設置などをしませんでしたが、その作品の調査や資料の整理などを担当の方のご指導のもとを行いました。作品数はとても多く大変でしたが、学芸員の方々が展示を考えるうえでの調査や資料が少しでも役に立つかもしれないと思うと、とてもやり甲斐を感じました。途中、至らないうちもありましたが、担当の方々が丁寧に対応してくださり、安心して作業をすることができました。また、他施設との合同ワークショップにも参加し、地域の方々や他の美術館の方々とお話しあることもできました。美術館の活動だけではなく、美術館外の活動に参加することができてとても有意義だったと感じています。

もし来年インターンシップに参加するか悩んでいる学生さんがいらっしゃれば、実際に美術館で活躍することで、自分が何ができる、何ができていないのかを知ることのできる貴重な経験になると思いますので、是非参加してほしいです。

将来、学芸員のお仕事をしていくか自身で活動をしていくかは悩んでいますが、どちらを選ぶかとしても今回得た経験を糧に今後活動していきたいと思います。
報告・記録

この章では、本学の博物館学芸員課程の活動記録、各種統計データを記載しています。
2017年度 博物館学芸員課程履修者数

<table>
<thead>
<tr>
<th>学科合計</th>
<th>1年</th>
<th>2年</th>
<th>3年</th>
<th>4年</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>環境デザイン学科</td>
<td>0</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>プロダクト・インテリアデザイン学科</td>
<td>2</td>
<td>7</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>ファッションデザイン学科</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>1</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>ビジュアルデザイン学科</td>
<td>2</td>
<td>4</td>
<td>16</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>まんが表現学科</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>映像表現学科</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
</tr>
<tr>
<td>アート・クラフト学科</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>10</td>
<td>22</td>
<td>29</td>
<td>18</td>
</tr>
</tbody>
</table>

博物館機関等への就職状況
豊岡市立美術館−伊藤清永記念館−／呉市入船山記念館

2017年度 博物館学芸員課程運営報告

本年度は、4年次生18名が博物館実習に当初参加した。また横尾忠則現代美術館インターンシップに履修生5名が参加した。

博物館学芸員資格には専門性に対する深い知識が必要であり、同時に社会人としての教養や接遇能力、コミュニケーション能力などが必要視されている。館園実習は、学芸員としての責任感や社会意識を身に付け、博物館で働く心構えを涵養する貴重な機会であり、対人関係における信頼性やコミュニケーション能力が求められることから、講義科目においても、学生に対して学芸員の基礎的な知識・技術の習得だけでなく、日常的に自己を磨き、全人的な向上に努めるように注意を喚起している。こうした接遇面での指導が必要な学生には個人指導を行い、実習館との連絡調整を図りながら注意を促した。

本学実習生に貴重な館園実習の機会をご提供いただき、的確なご指導を賜った博物館関係各位に対し、改めて感謝申し上げます。

① 博物館実習
・全体オリエンテーション 4月15日
・学内実習（事前・事後指導、見学実習、全体のまとめを含む）4月から12月まで
【前期日程】4月15日、4月22日、5月13日、6月3日、6月17日、7月1日
【後期日程】10月7日、11月18日、1月13日
・館園実習 7月から10月までの間、各実習館日程にて実施。

② 館園実習派遣先 2014～2017年度
兵庫県立考古博物館、兵庫県立美術館（2）、兵庫県立人と自然の博物館、神戸市立博物館、神戸市立美術館（2）、神戸市立森林植物園、神戸市立青少年科学館、福島市立美術館、西宮市立総合美術館、伊丹市立美術館、伊丹市立美術館（2）、宝塚市立水族館、明石市立天文科学館、BBプラザ美術館（2）、竹子大工道具館、大阪市立美術館、大阪美術大学商業學部博物館、福井県立恐竜博物館、宮崎県立美術館、備前市刀剣博物館（順不同。アンダーラインは2017年度に受け入れいただいた館園であり、名入れに入れいただいた館園には未尾に（2）と記した。）
2017年度 教職課程・博物館学芸員課程運営委員会委員

委員長 津田 徹 基礎教育センター 准教授
副委員長 山崎 均 基礎教育センター 教授
副委員長 平林 幹生 教務課 課長
桑田 芳治 基礎教育センター 特任教授
藤井 淳一 基礎教育センター 特任教授
福島 美和 基礎教育センター 特任教授
川北 健雄 環境デザイン学科 教授
安森 弘昌 プロダクト・インテリアデザイン学科 准教授
ばんば まさえ ファッションデザイン学科 教授
高 台泳 ビジュアルデザイン学科 助教
橋本 英治 まんが表現学科 助教
金子 照之 映像表現学科 准教授
さくま はな アート・クラフト学科 助教

2017年度 教職課程・博物館学芸員課程運営委員会の活動記録

<table>
<thead>
<tr>
<th>日 時</th>
<th>主 な 内 容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1回</td>
<td>2017年4月18日 (火)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度教職課程・博物館学芸員課程運営委員会開催スケジュールについて</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度教職課程にかかる各種業務取り纏め担当について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度豊能地区教員採用試験における大学推薦者の選考について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教職関係科目の時間割重複について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2016年度教職課程・博物館学芸員課程修了者数について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度教職課程・博物館学芸員課程年報の概要と作成スケジュールについて</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教職課程の再課程認定について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度教育実習訪問指導について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度博物館実習の実施について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会の報告について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>全国私立大学教職課程研究連絡協議会の報告について</td>
</tr>
<tr>
<td>第2回</td>
<td>2017年7月12日 (水)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度教職課程・博物館学芸員課程運営委員会開催スケジュールについて</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度教職課程の再課程認定について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教職課程の再課程認定申請について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度教育実習訪問指導について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度博物館実習の実施について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会の報告について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>全国私立大学教職課程研究連絡協議会の報告について</td>
</tr>
<tr>
<td>第3回</td>
<td>2017年11月22日 (水)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2019年度教職課程再課程認定申請について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>「大学独自設定科目」の設定（カリキュラム・知的財産権入門等）</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 教職課程のカリキュラムについて</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 博物館学芸員課程のカリキュラムについて</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 教員免許更新講習の実施について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度 教職課程及び博物館学芸員課程年報の構成について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 教員採用試験の状況について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 教育実習の内訳状況について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度 博物館実習実施報告について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度 博物館インターンシップの実施について</td>
</tr>
<tr>
<td>第4回</td>
<td>2018年3月5日 (月)</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教職再課程認定申請：カリキュラム・教員組織について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教育実習の履修資格の変更、事前相談実施結果について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 教員免許状更新講習の認定申請について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度 教員免許状更新講習の認定申請について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 教員採用状況について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2017年度 博物館学芸員課程修了者数について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 教職面談の実施について</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2018年度 博物館実習の派遣計画について</td>
</tr>
</tbody>
</table>

教職課程・博物館学芸員課程運営委員会委員／教職課程・博物館学芸員課程運営委員会の活動記録
『神戸芸術工科大学 博物館学芸員課程』に関する概要

1. ねらい
本学の博物館学芸員課程における教育・研究活動に資するため、『神戸芸術工科大学 博物館学芸員課程年報』を設ける。

2. 投稿資格者
① 本学博物館学芸員課程担当の教職員（専任、非常勤）
② 博物館学芸員課程実習館等の関係者
③ 本学博物館学芸員課程履修生（科目等履修生を含む）
④ 既卒者（現役学芸員等）

3. 原稿の構成
① 投稿者からの論文、研究ノート・ルポルタージュ・エッセイ等
② 課程履修生の教育・学修成果の報告
③ 既卒者からのメッセージ
④ 博物館学芸員課程の年間運営活動の報告
⑤ 博物館学芸員課程履修者数、資格取得件数
⑥ その他（必要に応じて、教職課程・博物館学芸員課程運営委員会にて審議する）

4. 発行
年度末（毎年3月中旬）に発行する。

5. 編集
博物館学芸員課程専任教員および事務局職員とする。
原稿は執筆者本人による責任とする。
原稿形式は、「神戸芸術工科大学紀要」の執筆要項に準ずる。
提出は、完全原稿とする。執筆手続きについては別途定める。

6. 頒布対象者
頒布を希望する本学博物館学芸員課程関係者（教員、職員、学生、本学関係者）、関係機関、その他
執筆者
国立国会図書館
本学情報図書館 ※本学情報図書館HPに電子版をアップロードする

7. 発行部数
250部とする（各課程年報の合本印刷とし、履修学生の増減によって調整する）。

8. その他
詳細は別途定める。また、必要に応じて教職課程・博物館学芸員課程運営委員会にて検討する。
編集後記

2017年度 博物館学芸員課程編集後記

この度、『神戸芸術工科大学 博物館学芸員課程年報 2017』を刊行いたしました。おかげさまで昨年度創刊号に続きまして、第二号をお届けすることができました。関係各位のご指導とご支援を賜り、厚くお礼申し上げます。この場をお借りして、本学の博物館実習生に貴重な実習の機会を快くご提供いただきました博物館の皆様、ご担当をいただいた学芸員及び関係各位に感謝申し上げます。また本課程の運営にさまざまな面でご協力とご助言をいただいた教職員の皆様、本年報にご寄稿をいただいた教員及び学生各位に改めてお礼申し上げます。

本学博物館学芸課程では、必修科目群のほかに、独自に関連科目を設定して開講しております。本号を皮切りにして、これらの科目ご担当の先生方のご理解を賜り、ご協力を仰ぎながら、毎号、ご担当いただいている講義科目の内容紹介や社会と時代の変化のなかで最新の関連トピックスをそれぞれの立場から寄稿していただくこととしました。

今後も、学生が自分の学修成果を一層深め、博物館関係の方々をはじめ、博物館に関心のある多くの人々にとって有意義な内容となるよう、さらなる充実を心がけていきたいと思います。

山崎 均
博物館学芸員課程担当・基礎教育センター／教授
教職課程年報 2017
教職課程年報2017

教員による報告・記録

「工芸基礎実習」における蓼蓝の葉染めについて
基礎教育センター 特任教授 桑田 芳治 .......................... 15

本学における『美術科教育法Ⅱ』を教育実習に活かす—演習指導に徹するⅢ—
基礎教育センター 特任教授 藤井 淳一 ................................. 21

美術科教育法における模擬授業と教育実習
基礎教育センター 特任教授 福島 美和 .............................. 26

教育実習における訪問指導の意義について
アート・クラフト学科 准教授 谷口 文保 ............................. 28

人間形成と習慣—エトスとエートスの関係について考える—
基礎教育センター 准教授 津田 徹 .............................. 30

「工業教育」の現状と今後に向けて
基礎教育センター 非常勤講師 前田 学 ................................. 35

卒業生・学生による報告・記録

“今”目の前の生徒と向き合って思うこと
2012年度 先端芸術学部 造形表現学科 卒業生 西脇 久実 ........................ 37

充実感で溢れた公立高校の非常勤講師を経験して
2016年度 デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 卒業生 佐藤根 ぴあの .......................... 39

兵庫県教員採用選考試験を受験して
デザイン学部 プロダクトデザイン学科 4年 浮田 康代 .......................... 40

教育実習を通して改めて学んだこと
デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 4年 大西 咲英 .......................... 41

教育実習を通して改めて学んだこと
デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 4年 酒井 文香 ......................... 41

教育実習を通して改めて学んだこと
先端芸術学部 映像表現学科 4年 末木 孝太朗 .......................... 42

教育実習を通して改めて学んだこと
先端芸術学部 クラフト・美術学科 4年 藤本 日生 .......................... 42

教育実習を通して改めて学んだこと
先端芸術学部 クラフト・美術学科 4年 松浦 優奈 .......................... 43
教育実習を通して改めて学んだこと
先端芸術学部 クラフトデザイン学科 4年 森 敦生

教育実習を通して改めて学んだこと
先端芸術学部 クラフトデザイン学科 4年 柳原 萌

教育実習を通して改めて学んだこと
科目等履修生 中川 愛子

報告・記録

2017年度 教職課程履修者数
教員採用実験の状況
就職状況の概要（過去3ヵ年）
教育免許状一括申請授与件数（過去3ヵ年）
2017年度 教職課程・博物館学芸員課程運営委員会委員
2017年度 教職課程・博物館学芸員課程運営委員会の活動記録
2017年度 教職課程実験対策セミナー実施状況
『神戸芸術工科大学 教職課程年報』に関する概要

編集後記
教員による報告・記録

この章では、本学の教職課程のねらいや教育活動、また各教職課程担当教員による授業のねらいや研究状況などを報告します。
「工芸基礎実習」における蓼藍の葉染めについて

基礎教育センター 特任教授 桑田 芳治

はじめに

「工芸基礎実習」は基礎分野の芸術工学基礎に属する科目であるが、教職課程において、中学校美術と高等学校工芸の免許取得を目指す者にとっては、必修となっている科目でもある。毎回多数の履修希望者がおり、施設・設備や用具等の関係で人数を制限している。履修者の決定では教職課程履修者を優先していることもあり、授業は、中学校・高等学校での美術、工芸の授業に活用できる内容で構成している。

その中のひとつに、ここ5年程取り組んできた蓼藍の生葉染めがある。この生葉染めは生葉とミキサーと染色容器となるボウルがあれば簡単に誰でも緑青色の染色が楽しめる。熱を加えたり、薬品を使ったりしないから小学生でも安全に染色ができる。何より緑色の生葉ジュースに15分絹布を浸けておくだけで鮮やかな緑青に染まる。自然の不思議を強く感じることができる驚きの染法であり、授業で取り組めば子どもたちの心と頭にインパクトを与えること間違いの教材である。

しかし生葉染めには、当然のことながら生の葉が必要で実施時期が限定される。「工芸基礎実習」でも、前期には十分な生葉を用意できるが、後期には時期を最大限繰り上げても10月に入ってからということになり、花が咲きはじめており、葉も小さく十分な量の生葉を用意できない。その為、昨年から盛期に摘み取った生葉を電子レンジで乾燥した葉を保管しておき、使っている。ここでは年中染めることができる蓼藍の乾燥葉を使った染めの授業と、その前提となる藍の生葉染めの概要、更に紫染めについての実践などを記してみたい。

藍染めの化学

藍草の葉には、インジゴの前駆体であるインジカンという物質が含まれている。インジカンは水に溶け、高温でも変化しない物質である。葉が摘み取られたり、傷つ

たりすると葉に含まれる酵素の働きでインジカンはインドキシルに変化し、更に2個のインドキシルが結合してインジゴが生成される。インジゴは水に溶けない青色色素である。水に溶けないインジゴを染料として使う為には、水に溶ける状態にする必要がある。インジゴは環元する水に溶けるロイコインジゴになる。これが、分子間引力などにより纖維に付着する。その後、酸化して青色にもどすという手順を踏む。このような環元と酸化の反応を利用した染色方法を建て染めと言う。

藍の建て染めには二通りの方法がある。ひとつは微生物の環元力を利用する発酵建てで、もうひとつは化学薬品の環元力を利用する化学建てである。発酵建てでは藍からインジゴを基準の過程で同様に集積される微生物が利用される。化学建てには、ハイドロソルファイトが主に使われる。建て染めによる藍染めは麻や綿でもよく染まる。

生葉染めは建て染めとは違った染まり方であり、繊維に特異的に染まる方法である。生葉をミキサーにかけられた生葉ジュースや揉み出されて出て来た青汁の中でインジカンがインドキシルに変化し、インドキシルの1分子が纖維に引きつけられる。これはインドキシルが(十)と(一)の電荷を持つ双極子分子であり、同じく繊維も(十)と(一)の両極を持つことから磁石のように引き込まれやすい。そして、その場でもう一つのインドキシルと結合してインジゴに変る。生葉染めが、木綿などでセルロース繊維に染まりにくいのはセルロース繊維が双極性を持たないからである。

学校で生葉染めが広がっていく理由の一つに高価な絹にしか染まらないということがある。小学校の実践では生葉の叩き染めがあるが、これは木綿や麻、化繊でも比較的よく染まる（濃く染まる）。繊維の中でインドキシルが二量体のインジゴに変ることに違いはないが、浸し染めとは違った染着の原理である。

夢藍の栽培

4月の前期最初の授業時に学生に種蒔きを経験させる。
と言っても発芽用セルに3〜5粒の種を置いていくだけのことだが・・・。セルやポット、プランターでの栽培は、毎日の水やりが欠かせないので学校で栽培する場合は、その環境整備が必要である。水やりさえできれば蓼藍の栽培は難しくない。セルに植えている状態が最も水やりの労力が少なくなるので、5月の連休後ポットへの移植を行うように種蒔きの時期を考えるとよい。セルで発芽した苗は間引きしない。セルの中に根が十分に回った所でポットに移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁てきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入ってから一般的な約60cmのプランターに3株移植する。この時の水やり、施肥ともポットへの移植と同じである。プランター栽培では夏場の朝の水やりが欠かせない。畑には、梅雨入り直前に株間30cmで移植する。移植直後の水やりは十分に行なう。この時、各ポットに固形肥料を数粒ずつ置いておく。葉が繁ってきたらポット間の空間を倍に拡げる。6月に入
には染まらない。また、新しい乾燥葉でも生葉染め時の
濃さには染まらない。乾燥葉を作るためには、人手も燃
料も使うことになり、生葉よりは不経済である。しかし、
時季を問わず生葉染めに近い染めを楽しむことができる
というのは、学校で授業を組み立てる者にとっては大き
な魅力である。また、生葉染めに使う用具に加えて加熱
用具が必要であるが、加熱用具があれば藍以外の植物染
料を使った染に容易に発展出来る。学校における染めを
蓼藍の乾燥葉から始めるとほんの面白くて取り組みであ
るに違いない。

蓼の葉による紫染め
琉球藍は常温で生葉染めを加
熱することで紫染めができるという。紫色になるのはイ
ンジゴの異性体であるインジルビンの赤とインジゴの青
の混色による。しかし、蓼藍では琉球藍と同じ方法では
紫色に染めることはできない。

武庫川女子大学牛田研究室の「蓼藍の生葉染めによる
紫染め」の記事によると、琉球藍の生葉染めは弱アルカリ性で
あるという。蓼藍の生葉染めは中性である。
そこで、事前にアルカリ処理した絹布を、エタノール
水溶液で作った生葉ジェースで染めると紫色に染ま
る。前処理におけるソーダ灰の濃度とエタノールの濃度
を変えることによって一定赤味を調整できるということ
である。

大阪教育大学教養学科の任田康夫教授によると、ナイ
ロン布に藍の葉を叩き染めし、布から葉を取りはずさず、
湿潤の状態で1日室内に放置した後、石けんで洗うと紫
色に濃く染まっている。又、葉を布からはずして少し高
日の室温（30℃）で1日放置した後、洗うと赤色に染ま
っているということである。

蓼藍の葉で青だけでなく、赤も染めることができるとい
うことは非常に興味深いことである。しかし、中学校
や高校での週に1回しかない美術、工芸の授業や、総合
的な学習の時間等で、子どもたちに興味関心を持たせ、
驚きを与え、発展的な学習に繋げていきたいという課題で
は、単純な操作や工程で、しかも単時間に、できればそ
の場で大きな変化があることが成功の重要な要素にな
る。琉球藍の生葉による連続的な青染めと紫染めのよう
な染めが出来れば、驚きが採用心に繋がる完成度の高い
工芸の授業が成り立つと考えられる。

乾燥葉を使う以上、加熱用具としてコンロとステン
レス鍋が必要となる。琉球藍の生葉による紫染めの主
ポインタは加熱とアルカリ性の染料液である。インジカン
抽出に使う加熱用具はある。アルカリ性にするには、最
近はやりの洗剤、重曹がある。後期の乾燥葉を使った染
めの授業準備の過程で、青染めをした後の染料液を棄て
てしまうのももったいない思い、たまたま手元にあった
重曹を適当に染料液に加えて加熱し、絹布を入れてみた。
パイナザスラックで思いもかけない美しい赤紫に染
まった。

授業に使えるように何度か追試をしてみたが全く赤味
が出なかったり、出ても鮮烈と言える色でなかったりで、
色々な人に聞いてみて「蓼藍」は不安定であるというこ
のが分かった。美しい赤紫にこだわらず、子どもたちに不
思考を与えるだけなら、赤紫という曖昧な言葉で表現で
きる色が出れば十分と考え、最後の試行として生葉の酵
素を少量加えてみることにした。結果は上々で、琉球藍
の生葉染めによる紫染めとほぼ同じ簡単な手順で蓼藍の
紫染めができた。今年度の後期授業では、青染めに加え
て紫染めを実施することとした。

後期の乾燥葉染め
蓼藍による紫染めは不安定であり収穫時期や施肥方法
などによっても成否が分かられるという情報があり、学生
には均質な乾燥葉を配付することができるように、収穫
時別に分けている失活乾燥葉を全て混ぜ合わせることに
した。混ぜ合わせる為には粉末にする必要があるが、粉
末にしては、葉ではなく単なる染料の粉と思われかねない
ので、乾燥時の葉の姿を残したものと合わせて、
一人当たり20 g（生葉換算で100 g）を配付した。自然
乾燥葉については同一時期のもので必要量を満たした
ので粉砕していない。一人当たり4g（生葉換算で20g）を配付した。

10月に入ると水道水の水温も20℃を下まわる時もあり、酵素が活動し易いように、染料液の温度を45℃程度に調整してから酵素抽出液を加え、その後加熱せずに染色することとした。失活乾燥葉からのインジカン抽出は、80℃の熱湯で行うこととした。

乾燥葉染めの実際

実習においては1班5人とし、加熱用に班ごとにボンベ式の卓上コンロと保温とタイマー機能のある卓上IHヒーターを各1台、また、湯沸かし用に3㍑強のステンレスボウルを2個用意した。また、湯温を計るための温度計と菜箸も必要であった。それ以外のミキサーなどの用具類は、生葉染めと同じである。重曹は洗剤として販売されているものを一人当たり30g用意した。また、少量の生葉も使うことにしたので、花の付いた蓼藍を10株程刈り取ってきた。

手順（学生に示したものを転載）

① ステンレスボウル（大）に500cc×班員数の水を入れコンロで80℃まで加熱し、班の全員の染色容器に均等に湯を分ける。染色容器に数が書いてあるので自分の容器番号を覚えておくこと。（この湯は染色容器を温めるためのものである。80℃の設定は省エネのため。）

② ①の加熱の間に「失活乾燥葉」の袋を破らないように手で揉んで全体を粉にし、お茶用フィルター3枚に均等に分けて入れ、ステンレスボウル（小）に入れる。さらに1500ccの水を入れ、コンロが空くのを待つ。

③ インジカンを抽出する。コンロが空いたら順次80℃まで加熱し、ステンレスボウル（小）ごと染色容器の中に置き、別紙に指示した時間で抽出する。（この作業は班の全員が連続して行うこと。）必要な人は、この抽出の間に布の防染をする。（ボウルを染料容器の中に置くのは、ポウルが不安定であり、安全のためと、染料液の保温のため。）

④ 酵素を抽出する。ステンレスボウル（大）に500cc×班員数の水を入れコンロで45℃まで加熱し、班の全員のポリボウルに均等に湯を分ける。その湯に「自然乾燥葉」を入れる。時間は③の抽出が終わった少し前までとする。待っている間に「生葉」を10枚ほど摘んでおく。

⑤ ③の抽出時間が終了するまでに④のポリボウル内の湯と「自然乾燥葉」に「生葉」を加えてミキサーにかける。時間は1分とする。ジュースは濾し網（ゴミネット）で濾し酵素抽出液を作る。抽出液はポリボウルに戻しておく。ネットは3人で1枚を使うこと。

⑥ ③の抽出時間が終了したら抽出液をステンレスボウル（小）から染色容器に移し、温度を計る。液温が45℃になるように水を入れたポウルを使うなどして温度調節してから、酵素抽出液を加える。ここから反応が始まると。

⑦ 絹ストール（20g）を染める。ステンレスボウル（大）に水を張り、被染物をその中に浸けてから軽く絞り。

⑧ むらなく染めるためには、染料液の中で、被染物を常に動かしておく（繰る）必要があるが、どのよう

に染めるかは自由である。ムラ染めもよしである。染色時間は最長30分とする。気に入った色に染まった時点で作業を終える。ただし、色は乾燥後には薄くなる（淡くなる）ことに注意する。

⑨ 被染物をステンレスボウル（小）に移し、流しにしていく。被染物を軽く絞り広げて空気にあてる。既に発色しているので短時間でよい。被染物の水洗いは少なくとも4回は水を替えてステンレスボウル（小）を使って行う。絞ったり、板で締めたりした被染物は、一度目の水洗い後に絞った糸や輪ゴム等を外す。

⑩ 洗い終わったら、縮布が痛まない程度に絞り、広げ

「工芸基礎実習」における蓼藍の染染めについて

---18---
たタオルの上に広げて、タオルごと巻くなどして、タオルに水を吸い込ませる（乾燥に時間がかかるとくすんだ色になる）。物干しロープで乾燥させる。

ここからが紫染めの手順
⑪（この作業は⑫の酵素抽出液を加えた40分後から1時間後までの間に行うこと。）染色容器に入っている染料液から1,500ccをステンレスボウル（小）に移す。残った液は、流しに流してよい。この染料液に15％の液を30g入れてよく攪拌する。更に、コンロで60℃までゆっくり昇温する。ガスコンロを使う場合は必ず五徳の上に網をおき、その上にステンレスボウル（小）を置くこと。（網を置くのは安全のため）

⑫ ポケットチーフを染める 被染物（ポケットチーフ4g）の前処理は⑩と同じ。⑪の液温が60℃に上がったら被染物を染料液に浸ける。染色時間は最長15分とする。その間、染料液の温度が55℃＜液温＜65℃となるように温度管理をすること。染色後の処理は⑨⑩と同じである。

⑬ 各自使用した容器等の用具を洗って雑巾で水を拭き取る。濡れた布類はポリ袋へ入れる。

⑭ 班の全員が染色し終わったら、共同で使用した用具類を水洗いし、雑巾で水を拭き取ってコンテナの中にはし、用具類の拭き取りにタオルは使わないこと。

まとめ
乾燥葉による「青染め」について
この乾燥葉による染めの前半、青染めについては安定しており、それなりの色に染めることができた。しかし、少し彩度に差が出た。その原因として染色時間、染料液の温度、インジカンと酵素の抽出量、濃度と考えられる。時間については30分を上限としており、10分で終了した場合もあった。授業時間から考えても、発色の状況を考えても上半30分という時間設定は適当であったと考えている。

液温については、45℃から染めはじめて終了時（30分経過後）は30℃程度になっている。夏に加温しない場合よりも高い液温で染めており妥当な所と考えている。

インジカンの抽出条件は、1台のコンロを5人で使用していること、授業時間が限定されていることから、全員同じ条件を設定することができなかった。そこで液温と経過時間の積が同じになるように時間設定を示して抽出を指示したが、その設定どおりに進めることができたかどうかは不明であり、抽出不足もあったと考えている。

そこで、仕事後に、抽出に要する最低時間と温度を決めるための実験を行った。80℃の湯の中に失活乾燥葉を浸し、火を止めて10分、20分、30分放置した3種のインジカン抽出液を用意し、同じ酵素抽出液を使って30分間染色をしたところ、ほとんど差のない結果であった。以後、「80℃の温に浸して10分間放置」を最低抽出条件とすることがあった。

酵素の抽出条件については、班毎では、ほぼ同じ条件で実施できたと考えている。最適と考えられる条件については、生葉を手に入る来年に実験し考えてみたい。

青染めを失敗した例が1例あったが、これはインジカンの抽出時間が短すぎたようである。

乾燥葉による「紫染め」について
上記の手順⑪⑫が紫染めの全てである。染料液に重曹を加えて弱アルカリ性にし、加熱し、布を投入するだけである。紫色に染まる場合は、布を投入後数分で薄い赤味がついてくる。その後染料液中浮遊するインジゴが布の表面に付着して濃い青色になり、染料液も同じく濃くなる。布は水洗いするとインジゴが洗い流されて紫色が出てくる。紫色に染まらない場合は、投入後数分経っても布にも、染料液にも変化がない。

今回の2回の授業では、ほぼ8割の成功率であった。色の違いはあれば、紫色を手にすることができた。色の違いは、紫染による赤紫色の濃淡、インジカンによる青味の濃淡である。1割の失敗は赤味がほとんどない、薄いグレーベやごく薄いブラウンに染まっている。原因について
ての検証はできていない。蓼藍の生葉が手に入る来年に、もう少し科学的に検証し安定した紫染めができる手順を確立したいと考えている。気候条件は多くの点において確認しなければならない。

参考文献
裳華房社刊「植物染のサイエンス」
染太郎の口伝帳天然染料の巻（北澤勇二著）
武庫川女子大学 牛田智「生葉染色の化学的な観察とその実際方法—藍の生葉染めによる絹の紫染め」、染色α No225、p64 - 67（1999）
大阪教育大学 平成18年度科学機器共同利用センター コロキウム「藍染のいろいろな方法とその科学」における講演要旨（自然研究講座 佐田康夫）
本学における「美術科教育法Ⅱ」を教育実習に活かす
―演習指導に徹するⅢ―
基礎教育センター 特任教授 藤井 淳一

1 はじめに

今年度の教育実習は5月末から6月中旬にかけて実施された。今年度の担当は6名であり、教育実習を通して、日々成長していく学生達を視察すること、楽しみであり、少々不安を感じるところでもある。自らの授業も4年目を迎え、内容的にもほぼ完型に近づいており、教育実習を他の学生達に見せてということや考え方などの教育実習という現場で生かされ実践できているのか、確認できることは楽しみでもある。本学では、「美術科教育法Ⅰ」を通して、基本的な、指導案や年間計画、学校教育活動の内容や指導などを学び、その基本を踏まえての「美術科教育法Ⅱ」では、より実践的な立場に立ち、演習を通じて教育実習に必要なスキルや課題の対応策など、教員として「多様な美術の授業展開ができる力」の育成を目指している。そのため「美術科教育法Ⅱ」では、徹底した手書きによる指導案や年間計画、分野ごとの「教材研究」の指導方法を手書きする中、その添削に力を入れ、毎回、学生たちの指導案と対峙することで、その表現力や指導内容のチェックを詳細に行っている。また、それらの解説を行う中で学生が学び、育成された力が、教育実習という現場で生かされて初めて、その実践の意味が理解される。当然、現場というものは、机上で考えてきた以上に変化があり、多様な問題をかかえている。3週間（又は2週間）という限られた期間だけのことで、多くのことを経験して、見聞きし、多くの先生方に指導を受けて、その解決や対応に向けて真摯に学ぶ日々を過ごす中で、将来的、どのような道を歩むかを教職を目指した学生達にとっては、貴重な経験として生き続けることを確信している。

2 授業の概要・授業計画について

美術教員にとって必要な教材研究、指導案の作成、授業の展開を3本の柱と考え、それらを系統的且つ繰り返し手書きによる演習を行うことで、その能力の育成を図る。

授業計画（H29 後期 授業時間 90 分）

第1回：イントロダクション（美術科教育法Ⅱとは 美術科教育の現状と課題について）9/26
第2回：美術科教育の学習指導1 単元を学ぶ（A 表現・B 鑑賞の演習）10/3
第3回：美術科教育の学習指導2 単元に即した中学美術指導案の作成（A 表現・B 鑑賞の演習）10/10
第4回：美術科教育の学習指導3 中学美術の年間指導計画の作成（シラバス作成演習）10/17
第5回：美術科教育の学習指導4 高校美術の年間指導計画（シラバス作成演習）10/24
第6回：美術科教育の学習指導5「指導細案の作成①単元の指導案」（A 表現の演習：中高選択）10/31
第7回：美術科教育の学習指導6「指導細案の作成①本時の指導案」（A 表現の演習：中高選択）11/7
第8回：美術科教育の学習指導7「指導細案の作成②単元の指導案」（B 鑑賞の演習：中高選択）11/14
第9回：美術科教育の学習指導8「指導細案の作成②本時の指導案」（B 鑑賞の演習：中高選択）11/21
第10回：美術科教育の教材研究1「美術史 表現と鑑賞」（西洋美術史の演習：中高選択）11/28
第11回：美術科教育の教材研究2「美術史 表現と鑑賞」（日本美術史の演習：中高選択）12/5
第12回：模擬授業1 日目「1班の模擬授業とその授業評価及び講評」（中学1種美術）12/12
第13回：模擬授業2 日目「2班の模擬授業とその授業評価及び講評」（中学1種美術）12/19
第14回：模擬授業3 日目「3班の模擬授業とその授業評価及び講評」（高校美術1種）1/9
第15回：反省まとめ（教育実習・教員採用試験に向けて）1/16
※模擬授業全3回の完全出席を単位認定の必要条件としている。他者の授業を真摯に見ることで、自らの足りない資質を発見・確認し、本番の教育実習に繋げてもらいたい。
3 研究授業を視察した6名について その概要とまとめ

■岡村真友梨 研究授業：6月6日（火）
まんが表現学科4年の岡村さんの実習校、県立尼崎稲園高校を訪問。岡村さんの「色彩を学ぼう」の研究授業を見学。全体的に準備（指導案も含めて）もしっかりとされており、安定のある研究授業であった。何よりも、岡村さんは笑顔をたやさず、明確な声で、しっかりと指示をだし、授業の流れを作り出していた。岡村さんの真面目な性格が授業の随所にみられ、生徒からの質問にも、丁寧に回答していたことが印象に残った。

■堀内美里 研究授業：6月7日（水）
ファッションデザイン学科4年の堀内さんの実習校、県立兵庫工業高校を訪問。堀内さんの「カラーコーディネーター検定 色彩編」の研究授業を視察。座学のためか、やや一方的な授業の進め方になった点は気になったが、しっかりと事前準備がなされている、自らの高校時代の作品を生徒に見せるなど工夫もなされていた。キャッチボールが少なかった点は、今後の課題となるが、授業後には大川校長からの直接、ご指導頂いたことは堀内さんに良い経験になったと思われる。

■中村美樹 研究授業：6月8日（木）
ファッションデザイン学科4年の中村さんの実習校、倉敷工業高校を訪問。中村さんの「四大天然繊維 羊毛編」の研究授業を視察。座学であったが、よく事前準備もされており、教育機器を使っての説明も、その操作もよどみなく行われており、担当教員からもよく頑張っているとの評価をいただいた。やや早口である点は、多くの先生からも指摘をうけたが、テンポのある授業と前向きにとらえた評価をしたい。工業の座学の授業は、実習生にとっては大変難しいものであるが、説明もわかりやすく、好印象の研究授業であった。

■浮田康代 研究授業：6月13日（火）
プロダクトデザイン学科4年の浮田さんの実習校、姫路市立広畑中学校を訪問。浮田さんの「絵文字がしゃべりだす」を視察。しっかりと準備がされ、生徒との距離をよく保ちながら授業展開ができ、活発な研究授業であった。手作りの絵文字の資料も良くできており、授業の始めに活用し、本時の目標をより明確にわかりやすく説明ができたことが、全体の流れを良くしていた。又、巡回指導も個別に対丁寧になされていた。

■大西咲英 研究授業：6月14日（水）
ビジュアルデザイン学科4年の大西さんの実習校、明石市立魚住中学校を訪問。大西さんの「ルネッサンスについて知ろう」の研究授業を視察。声が元々高く、大きな声がでないとというハンディもあったが、本番では落ち着きをと安定した授業ぶりであった。座学ということで、资料集を中心に説明したために、それ以外の具体的なイメージが湧きにくく、手作り資料の重要性を指摘しておいた。毎日の給食指導がうまく行かず苦労したとのこと。その三週間を乗り切った自分自身に成長を感じ、頑張り抜いた自らに期待して欲しい。

■三宅貴登 研究授業：6月15日（木）
映像表現学科4年の三宅君の実習校、加東市立加東中学校を訪問。三宅君の「ピカソからアイデアの盗み方を学ぼう」の研究授業を視察。全体的に準備（指導案・資料・教育機器の使用等も含む）もしっかりとできており、安
定感のある、明るい研究授業であった。何よりも、三宅君と生徒との距離感がよく、生徒たちが楽しく、しかも集中して授業を受けていたのが素晴らしい。また、声も大きくテンポもあり、授業マネージメントができるようになるとは、教えとして充分やっていける内容である。

4 今年の教育実習で指導された細案の参考例

5 H29年度の教育実習を視察して見えてきた課題等
－研究授業を5つのポイントで考える－

① 担当教員との事前の打合せ

教育実習が始まる前に、担当教員との事前の打合せが重要である。事前の打合せで、大学の学部や学科の教育方法や実習の目的を理解し、生徒たちの実習の状況を把握することが必要不可欠だ。打合せでは、実習の目的や内容、生徒たちの状況、大学の教育方法などを十分に理解することが肝心である。
学校側
・教科指導を行う美術教員の確定（部活動指導を含む）
・ホームルーム指導担当教員の確定（道徳指導・給食指導を含む）
・授業担当する日程、研究授業の日程及びテーマの確定

生徒側
・自らの自己紹介（ポートフォリオを持参する）
・受け持つ授業数、研究授業でのテーマ等の摺合せ
・上記日程の確定

各担当教員とよく話し合い、より具体的な日程や「研究授業のテーマ」を確認し、大学の指導担当者に報告する。

②指導細案作成について
・原則、実習校で指導案の枠組を持っているので、その枠に従って、授業毎の略案、細案を作成する。特に、枠を指定されない場合は、本学で使用している枠の活用も可能。

③事前の資料作成について
・より授業を計画的に進めるために必要な事前資料は、研究授業のテーマに沿って周到に準備する（パワーポイント・図版資料・生徒作品・手順表・評価表・アイデア用紙等）

④板書・声量・生徒との距離間について
・研究授業時のチェックすべき重要ポイントである。研究授業を行う前、数回の授業チャンスがあるので、その際に担当教員からの板書や声量、生徒との距離間についてのアドバイスを必ず受け、研究授業に臨む。
・教育機器の使用方法等についても、きちんと指導をうけ、適切に使用できるよう事前にその扱いに慣れておくこと。

⑤研究授業を通じての学びについて
研究授業は、教育実習の最終週に実施される。それまでには、数回の授業を実践し、生徒との関係や略案を通した授業展開について、美術科担当教員の指導が行われている。
指摘された課題を前向きにとらえ、その対応について、実習生として、完全で考えた工夫をみつけ、創意工夫を楽しみながら主体的に表現する活動や、クラスやグループで作品を鑑賞し、互いの意見を述べ合う中で、発見したり考えを深めたりする活動等にみられるように、子どもの主体性を基盤とし、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、協働的学習など、多様な形態を含んでいる。その意味で、美術を通した学習はアクティブ・ラーニングの先導的なモデルとなっている。

美術教育のアクティブ・ラーニングについて
アクティブ・ラーニングは「教育による、一方向的の講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学修への参加を取り入れた授業や学習方法の総称」と言われている。美術教育の理念として、国際的に共有されている「芸術による教育」（H. Read）では、教師が主導ではなく、子ども達の内にある素質や創造力を引き出すことを基本的な考え方となっている。その点から考えてみると、美術教育の実践は、以前より「学習者の能動的な学修への参加」を重視してきているといえる。

アクティブ・ラーニングという観点から改めて、美術教育の理念、内容、方法等を考えてみると、子どもが自分で表したいことをみつけ、創造工夫を楽しみながら主体的に表現する活動や、クラスやグループで作品を鑑賞し、互いの意見を述べ合う中で、発見したり考えを深めたりする活動等にみられるように、子どもの主体性を基盤とし、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、協働的学習など、多様な形態を含んでいる。その意味で、美術を通した学習はアクティブ・ラーニングの先導的なモデルとなっている。

アクティブ・ラーニングとしての図画工作科・美術科等の学習
○図画工作科、美術科等の学習活動における子どもの主体的な学びは、小学校での自らの感覚やイメージをもとに発想・構想していく「造形遊び」や、中学校での主体的に表現する「主題を生みだす」活動などに、その特質が以前より示されている。
○ゲーム活動やロール・プレイングを取り入れた鑑賞活動では「作品を通じた子どもの話し合いによる気づき」や「反省をもとにした作品理解と他者の理解を深める鑑賞活動」も、アクティブ・ラーニングである。

「美術による教育」が、「思考力・判断力・表現力」の育成と「21世紀型スキル」や「キー・コンピテンシー」（単なる知識や技能の習得を越え、共に生きるための学力を身に付け、人生の成功と、良好な社会を形成するための鍵となる能力概念）で主張される理念や考え方を以前より実践してきたことが、これからの知識基盤社会において必要とされるイノベーションや「予測を超えた問題の解決に柔軟に対応することが「行った教育実習の真の価値」を決定する。

6 美術教育のアクティブ・ラーニングについての考え方
アクティブ・ラーニングは「教育による、一方向的の講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学修への参加を取り入れた授業や学習方法の総称」と言われている。美術教育の理念として、国際的に共有されている「芸術による教育」（H. Read）では、教師が主導ではなく、子ども達の内にある素質や創造力を引き出すことを基本的な考え方としている。その点から考えてみると、美術教育の実践は、以前より「学習者の能動的な学修への参加」を重視してきているといえる。

アクティブ・ラーニングという観点から改めて、美術教育の理念、内容、方法等を考えてみると、子どもが自分で表したいことをみつけ、創意工夫を楽しみながら主体的に表現する活動や、クラスやグループで作品を鑑賞し、互いの意見を述べ合う中で、発見したり考えを深めたりする活動等にみられるように、子どもの主体性を基盤とし、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、協働的学習など、多様な形態を含んでいる。その意味で、美術を通した学習はアクティブ・ラーニングの先導的なモデルとなっている。

アクティブ・ラーニングとしての図画工作科・美術科等の学習
○図画工作科、美術科等の学習活動における子どもの主体的な学びは、小学校での自らの感覚やイメージをもとに発想・構想していく「造形遊び」や、中学校での主体的に表現する「主題を生みだす」活動などに、その特質が以前より示されている。
○ゲーム活動やロール・プレイングを取り入れた鑑賞活動では「作品を通じた子どもの話し合いによる気づき」や「反省をもとにした作品理解と他者の理解を深める鑑賞活動」も、アクティブ・ラーニングである。

「美術による教育」が、「思考力・判断力・表現力」の育成と「21世紀型スキル」や「キー・コンピテンシー」（単なる知識や技能の習得を越え、共に生きるための学力を身に付け、人生の成功と、良好な社会を形成するための鍵となる能力概念）で主張される理念や考え方を以前より実践してきたことが、これからの知識基盤社会において必要とされるイノベーションや「予測を超えた問題の解決に柔軟

本学における「美術科教育法Ⅱ」を教育実習に関かす演習指導に役するⅢ
に対応できる人間」に求められる資質・能力の育成に、最も重要な教科であることを、あらためて確認しておきたい。最後になるが、「生きる力」の英訳は「生きる喜び」となっている。「生きる喜び」を考えた時、美術を含む芸術を通じて学び感じる「豊かに生きる生活」の中にこそ、味わうことができる真の喜びであることを、美術教員として忘れないにいて欲しい。

7 実習風景

本学における「美術科教育法Ⅱ」を教育実習に活かす一演習指導に関するⅢ—
美術科教育法における模擬授業と教育実習

基礎教育センター 特任教授 福島 美和

1 はじめに

昨年度の年報では本学での勤務が1年に満たなかったこともあり、教職課程の指導に当たっての雑感めいたことと公立学校に勤務する教員の実態として、病気休暇を取ったり早期退職をしたりする若手教員が多くなっていことを述べた。その上で、メンタルヘルス教育の充実の重要性についても触れた。

2年目となった今年は、担当の講座がひと回りしたこともあり、授業の内容や学生の様子も一応分かってきている。教員を目指す上で求められる能力として重要なもの一つであるコミュニケーション能力や、メンタル面での強さなど、学生に不足していると感じるものがある一方で、真面目な態度など感心することも多い。

そこで今回はタイトルにもあるように、美術科教育法における模擬授業と実際の教育実習について取り上げ、それらの関係や気付いた点について私見を述べてみたい。

2 模擬授業について

美術科教育法Ⅰ及びⅡ共有、全15回の授業のうち後半の4回は模擬授業を実施する（年度により授業数が違うため）。Ⅰの授業においては、前半で主に学習指導要領に基づいて美術科教育の意義や目的、評価など理論的な内容を学ぶ。その後実践事例の研究もあり、指導計画をたてた上で模擬授業へと続く。

Ⅱの授業では主に指導案の検討に時間を割き、指導案の作成に重点を置いた指導を徹底する。一口に指導案と言っても様々である。中学校と高等学校による授業の設計図であり骨格とも言えるものである。いい加減な指導案であれば内容の伴わない授業になるし、逆に絶対に計画された指導案であれば、その授業は目的が半分達せられたようなものである。

前期、Ⅰの授業で自信なさそうにおぼつかない模擬授業をしていた学生が、後期になると格段にいい授業をすことがある。Ⅱの授業では添削指導を受けながら指導案を作成することで、イメージが明確になり授業の展開等を整理されるので、自信を持って臨むことができるからである。

人数と時間の関係で、模擬授業は1人10〜15分程度しかできない。学生同士の質疑応答と教員のアドバイスも含めるとそれほど長い時間を取れないのが実情である。しかし、短時間とは言え同級生を生徒役にして教壇に立つと、普段一緒に授業を受けてる仲間であっても緊張するものである。ただそれをすることで度胸もつき、前後期で2回だけの経験であるが、教育実習に行くことを考えると絶対に必要なものである。また採用試験を受験する場合でも必ず役に立つはずである。

3 教育実習の概要

美術科教育法において、指導案を作成した後に実施する模擬授業が学内における授業のまとめだとすると、教育実習は教職課程で4年間学んだものの総決算と言っても過言ではない。

教育実習で学生が体験することは多岐にわたり、おそらく多くの学生が初日の朝、職員室で教職員に挨拶するところから始まり、場合によってはそのまま全校朝礼で全校生の前で紹介されることもある。その後、管理職や生徒指導部長から実習校の概要や生徒の実態についてレクチャーを受けることが多く、空いた時間は授業の見学である。

給食のある中学校ならば昼の給食指導があり、授業が終
わればホームルームでの挨拶、清掃指導と休む間がない。実習生の授業が用意されていることも多いが、実習生が少なければ宿務室で過ごすこともある。放課後は部活指導をすることもあろう。1日の終わりには実習ノートの記録が待っていて、あっという間に1日は過ぎていく。いずれにしても最初の1週間ほどは授業の見学をして、教材の準備や印刷等、倫理の手伝いが中心である。実習期間中に体育大会や文化祭などの行事が実施される場合もあるので、その準備の手伝いも大きな仕事である。

実習期間にもより、2週目あたりから研究授業の準備が始まり、指導案を作ったり担当教諭からの指導を受けて始める。自分と同じ教科の先生方の授業や他の実習生の授業を見学したりして、いよいよ自身の研究授業を迎えようである。研究授業をするまでに練習的な意味合いで（それも生徒にとっては大切な1時間の授業なのだが）他のクラスで授業をすることもあるが、研究授業本番には指導教諭だけでなく、校長や教頭を始めとして他の教諭や実習生、我々のような大学の教員までが参観する。その緊張感たるや学内で行う模擬授業の比ではないはずである。

しかし、その緊張も大学で模擬授業を経験していることで幾分かは緩和され、ほんの僅かではあるが何かの役に立っていると信じたい。余談になるが、私が大学生の時は教育系の学部でもなく、教職課程を取っていた学生も僅かであったため、模擬授業をした覚えもなく、指導案の書き方も簡単にしか教えてもらえなかったので実習が不安だったのを記憶している。

4 模擬授業と教育実習の充実に向けて

学生は実習校が中学である高校であれば、自分自身が生徒の時の目線で見た学校のことを知らない。実習に行き教師の立場で学校というところを見ると、なんと忙しく色々な種類の仕事があり、そして雑用の多い職業というのに気づくはずである。

そこで教職を目指すことに不安を感じたり、自信を無くしたりして退路を考え直す者がいれば、反対に授業や部活で生徒と触れ合うことでその面白さや手応えを感じ、改めて教職を目指す学生も出てくる。先にも簡単に触れたが、教師の仕事の範囲はとても広く、その内容は非常に多様なものである。しかし、何と言ってもその中心にあるのは授業であり、生徒と授業で向き合っている時が教師として勝負をしている時である。

その後授業を充実したものをするためには、十分に教材研究をし、しっかりとした指導計画を立て、適切な指導案を作成することが重要である。大学の授業においても、今まで同様に指導計画及び指導案作成の指導に力を入れ、模擬授業を効率的にカリキュラムに組み込んでいくことが肝要であろう。

昨年度、今年度と模擬授業を見る中で気付いたことがある。授業計画が不十分な学生が多い。他の教科と違い元々板書する量は少ないのだが、それだからこそ見本の作品や資料の提示の仕方と合わせて板書の効果的な計画を立てられるように重ねて指導していきたい。

4.2 模擬授業と教育実習の充実に向けて

学生は実習校が中学である高校である。自分自身が生徒の時の目線で見た学校のことしか知らない。実習に行き教師の立場で学校というところを見ると、なんと忙しく色々な種類の仕事があり、そして雑用の多い職業だということに気づくはずである。

そこで教職を目指すことに不安を感じたり、自信を無くしたりして退路を考え直す者がいれば、反対に授業や部活で生徒と触れ合うことでその面白さや手応えを感じ、改めて教職を目指す学生も出てくる。先にも簡単に触れたが、教師の仕事の範囲はとても広く、その内容は非常に多様なものである。しかし、何と言ってもその中心にあるのは授業であり、生徒と授業で向き合っている時が教師として勝負をしている時である。

その後授業を充実したものをするためには、十分に教材研究をし、しっかりとした指導計画を立て、適切な指導案を作成することが重要である。大学の授業においても、今まで同様に指導計画及び指導案作成の指導に力を入れ、模擬授業を効率的にカリキュラムに組み込んでいくことが肝要であろう。

昨年度、今年度と模擬授業を見る中で気付いたことがある。授業計画が不十分な学生が多い。他の教科と違い元々板書する量は少ないのだが、それだからこそ見本の作品や資料の提示の仕方と合わせて板書の効果的な計画を立てられるように重ねて指導していきたい。

4 模擬授業と教育実習の充実に向けて

学生は実習校が中学である高校である。自分自身が生徒の時の目線で見た学校のことしか知らない。実習に行き教師の立場で学校というところを見ると、なんと忙しく色々な種類の仕事があり、そして雑用の多い職業だということに気づくはずである。

そこで教職を目指すことに不安を感じたり、自信を無くしたりして退路を考え直す者がいれば、反対に授業や部活で生徒と触れ合うことでその面白さや手応えを感じ、改めて教職を目指す学生も出てくる。先にも簡単に触れたが、教師の仕事の範囲はとても広く、その内容は非常に多様なものである。しかし、何と言ってもその中心にあるのは授業であり、生徒と授業で向き合っている時が教師として勝負をしている時である。

その後授業を充実したものをするためには、十分に教材研究をし、しっかりとした指導計画を立て、適切な指導案を作成することが重要である。大学の授業においても、今まで同様に指導計画及び指導案作成の指導に力を入れ、模擬授業を効率的にカリキュラムに組み込んでいくことが肝要であろう。

昨年度、今年度と模擬授業を見る中で気付いたことがある。授業計画が不十分な学生が多い。他の教科と違い元々板書する量は少ないのだが、それだからこそ見本の作品や資料の提示の仕方と合わせて板書の効果的な計画を立てられるように重ねて指導していきたい。
教育実習における訪問指導の意義について

アート・クラフト学科 准教授 谷口 文保

1、はじめに

教育実習は、教育の実践的な知識や技能等を学ぶことを目的に、中学校や高等学校で実施される実習である。本稿では、教育実習における訪問指導について、これまでの筆者の取り組みを振り返り、その意義と課題を考察する。教員免許の取得を目指す学生にとって、教育実習は最も重要な場面の一つである。本稿が教育実習や訪問指導の改善、充実に役立つことを願う。

2、教育実習の流れ

本学教職課程では、4年次に「教育実習A（教育実習I）」「教育実習B（教育実習II）」が開設されている。実習期間は、中学校免許取得には3週間、高等学校免許取得には2週間が必要となる。

教育実習を希望する学生は、3年次4月の説明会に参加しなければならない。そして、学生各自が実習希望校に、実習の受け入れの問い合わせを行う。実習の受け入れが決まったら、その学校の担当教諭と相談し、事務手続きや実施日程等を段階的に調整していく。本学では、多くの実習は、4年次の5月から7月の間に実施される。

3、美術の教育実習の概要

美術の教育実習では、絵画、彫塑、工芸、デザイン等の実技や鑑賞の授業について実習を行う。一般的に教育実習は授業計画から始める場合が多い。担当教諭の授業を、メモを取りながら見学する。次に学習指導案を作成する。作成した指導案は、担当教諭に提出し、修正や加筆の指導を受ける。完成した指導案に基づいて授業準備を行う。材料や道具を準備し、参考作品や指示資料を制作する。そして担当教諭の指導の下で、実際に授業を実施し、反省会を行う。実習の最後には研究授業を行う。

学生は、校内の全教諭に研究授業の日程を知らせる。研究授業では、教諭や他の教育実習生に指導案を配布する。授業終了後、学生は担当教諭や参観者から助言や指導を受ける。

写真1）研究授業の様子（筆者撮影、2016年）

写真2）研究授業の様子（筆者撮影、2016年）

4、訪問指導の流れ

本学では、教育実習の訪問指導を教職課程担当教員が分担して行っている。担当教員が、本学学生が実習を行っている中学校や高等学校を訪問し、実習生の指導を行う。筆者は毎年3名から5名の学生を担当している。訪問先の多くは兵庫県南部の学校であるが、九州や北陸等に出張することもある。

訪問指導の流れは下記の通りである。4月から5月に訪問指導に向けて担当学生とミーティングを行い、訪問指導の日程調整を開始する。中学校や高等学校の都合が優先されるため、訪問日程は教育実習の直前か実習開始直後に決まることが多い。ミーティングでは、教育実習に
訪問指導は、実習の後半に実施できるように日程調整を行う。実習の終盤に実施される研究授業は、教育実習の成果が確認できる。

訪問指導では、まず校長を訪ね、実習の受け入れについて感謝を伝え、実習の様子について聞き取りを行う。その後、教科の指導を担当していただいている教諭に面会し、学生の授業を参観する。授業参観を行った後は、学生と担当教諭と筆者の三名で反省会を行う。中学校や高等学校の教諭は多忙であるため、筆者と学生の二人で反省会を行う場合も多い。反省会では、参観した授業の振り返りを行い、学生に、「狙い通りの指導が出来た点」や「思ったように出来なかった点」等を発表させる。その上で、担当教諭からそれぞれ授業の講評を行い、指導方法の改善や発展について助言する。時間割や担当教諭の都合によるが、反省会は15分から1時間程度行う。

5、訪問指導の意義

訪問指導の意義は、3つある。まず、学生の指導である。教育実習の取り組み状況を実際に現地で確認することは重要である。学生が担当教諭や生徒と良好な関係を構築できているか。大学で学んだ理論や知識を活かし指導案を作成できているか。計画的に授業を進めているか。生徒への発問や声掛けが的確。教室全体を把握できているか。こういったことは担当教諭からの聞き取りと授業参観を通して、確実に把握することができます。その後、学生と校長面談し、学生が現状の課題を明確化していくように指導する。そして、その対処方策を改善策として助言することによって、教育実習に関する学生の理解を深まり、その実践力が向上する。

次に、訪問指導は大学と受け入れ校との情報交換を行う貴重な機会である。大学からは、教職課程の状況や大学全体の教育的取り組みについて伝えることができる。受け入れ校からは、教育実習について大学へ要望を伝えたりすることができる。また、訪問指導で得られる、中学校や高等学校の現状や課題に関する情報は、本学教職課程を時代に適応した内容に更新していく上で重要である。こうした情報交換を積極的に行うことで、大学と中学校や高等学校との認識のズレを軽減し、信頼関係の醸成につなげることができる。

訪問指導では、中学校や高等学校における教科教育の現場を実験し、教科教育の課題や新しい取り組みについて教諭から直接聞き取ることができ、筆者は美術科教育法Ⅰの授業を担当しているため、訪問指導は教育現場を研究する貴重な機会と考えている。美術教室のレイアウトや施設設備。教室に掲示されている授業課題。廊下に展示してある共同製作。それらには各校の歴史と美術担当教諭の創意工夫が蓄積されていて、美術科教育の観点から興味深い取り組みが多い。美術担当教諭との会話からは、美術科教育の最前線の課題や発展的取り組みを学ぶことができる。筆者にとって訪問指導は、美術科教育法Ⅰの改善や発展を促進し、授業の活性化につながっている。

6、まとめ

訪問指導の課題は日程調整である。筆者は、大学の授業や会議の日程とのすり合わせにいつも苦労している。効果的な訪問指導を実現するために、よりよい日程調整のシステムを考える必要がある。

最後に、訪問指導は大学と中学校、高等学校の連携を促進する貴重な機会である。筆者は、教職課程担当の立場からも、教科教育の授業担当の立場からもこの機会をもっと有効に活用できるのではないかと考えている。今後、実践の場を増やした教員を養成するという関係者共通の目標を確認しながら、中学校、高等学校と連携してより良い訪問指導の実施を目指していきたい。
人間形成と習慣
―エトスとエートスの関係について考える―

基礎教育センター 准教授 津田 徹

1 はじめに

教育学において習慣はどう扱われてきたか。例えば、筆者が担当する本学の教職科目「教育原理」や「道徳教育論」では、児童・生徒の発達と学校教育との関連において、「基本的な生活習慣」を取り上げることがある。「基本的な生活習慣」とは、就学前に身に付けるべき生活習慣のことで、食事、排泄、睡眠、着脱衣、清潔の5つの習慣のことである。これらは子どもにとっての発達課題ないし生活課題であるが、まれに大学生においても基本的な生活習慣が身に付いていないことが見受けられ、とくに睡眠や食事の生活習慣は、学校生活はもとより、病気や生活の質に関係することがよく知られており、子どものみならず大人においても課題となっている。その意味において習慣の問題は全生涯にわたる人間形成上の重要な問題であり、学校教育においてもまたこの原理を認識し教育に当たることが重要である。さらにどのような内容を習慣づけるのかが人間形成上においても問題となる。卷間では「習慣は第二の天性である」とか「点滴石をもうがつ」、「雀百まで踊り忘れず」、「性相近し、習い相遠し」などの俚諺が習慣について言われており、育される言葉における観点からも習慣の意義を認めることができる。

本稿では、習慣そのものの意味を確認した後、学校教育における習慣の取り扱いについて確認し、次に習慣について言及した思想家たちを取り上げ、思うところを述べてみたい。

2 習慣の定義

『広辞苑』によれば、習慣とは「①日常の決りきった行い。しきたり。ならわし。慣習。②［心］後天的に習得し、比較的固定して、少ない努力で反復できる行動様式。イ狭義には、特に知識に関係したものは記憶と呼んで、運動に関連したものだけを習慣ということが多い。慣用表現：習慣は第二の天性なり」とある（電子辞書版、『広辞苑第五版』）。

漢和辞典（小川環樹他編、『角川漢英辞典―改訂版』、角川書店、1999年、p.802）によれば、習慣とは、「ならわし」とあり、続けて「少成は天性のごとし（子どもの頃に身につけた習慣は、もって生まれた天性に近い）、習慣は自然のごとし（習慣は自然にひきつける）」（漢（書）・賈誼伝）とある（訳語は筆者による）。

また、見田宗介他編、『社会学事典』有斐閣、平成8年、p.431によれば、習慣とは、「くり返し習うことによって、生活行動のなかに固定されたもの。学ぶも、習うも、ともに日本の習慣からすれば、真似するという意味がつよく、くりかえし行なう習慣をなぞるなかで無意識の層にまで定住した行動様式として、その特徴はパーソナリティの「基層」を構成する。」とある。


また、心理学の観点からは、習慣の一形態としての習慣が学術テーマとして挙
げられており、「習慣はおそらく人が考え得ることのできる学習のもっとも単純な形式であろう」(Haselgrove, Learning; A very short Introduction, Oxford U.P., 2016, p.4)と指摘されており、人間のみならず動物（ラット）も習慣により音楽を聞き分けたり、さらに驚くべきことにシナプスでさえ習慣化の傾向があるという(上掲, pp. 4-5)。習慣との関連で、可塑性（plasticity）の余地が習慣を可能とすることを考えられ、脳のシナプスが可塑的であることも議論されており、アン・グレイビールは経験に依存する可塑性、ダイナミックに変化する活動パターンを強調する(Clare Carlisle, on Habit, Routledge, 2014, p. 22)。教育学では可塑性とは、「教育の必要性」の要件の一つとも考えられており、特に人間の乳幼児の可塑性がその後の教育の存在を高めている(参考、武安宥、長尾和英編著、『人間形成のイデア―改訂版』、昭和堂、2010年、7頁)。

3 現代の学校教育と習慣

平成20年度（高等学校は平成21年度）の学習指導要領において、その特徴として学習習慣の確立が総則において示され、習慣の意義について取り上げられていることはよく知られている(参考、文部科学省編、『中学校学習指導要領』、東山書房、平成23年、15頁及び文部科学省、『高等学校学習指導要領』、東山書房、平成21年、15頁)。

また、道德において（平成27年から特設科目 道徳となった）も、「1 主として自分自身に関すること」の中の内容項目の一つである「望ましい生活習慣を身に付ける」及び「生活習慣に関する意識を育む」と、『中学校学習指導要領』の第3章において習慣について述べられている(参考、文部科学省、『中学校学習指導要領』、東山書房、平成23年、112頁)。

別の観点からは、現代のカリキュラム構成上の特徴の一つとして「一単位時間あたりの弾力的な運用」が可能となったことを挙げることができる。これはモジュール制（モジュラー制）とも言われるカリキュラム構成方法の一つで、従来の50分を標準時間単位とする考え方から、教科や科目のわからず即して、授業時間を小分けするなどして弾力的に運用して確実するという方法のことをある。このことにより、読書や計算、英単語や漢字の書き取りなど基本的な技術・知識の学習が、いわば学習習慣としての形成に寄与することが可能となっており、ここにおいても学校教育における習慣の応用が見られる。

4 習慣の実際化について尽力した思想家

歴史上振り返ってみると、習慣は、人間形成上、大きな意味を有するものとして、古今東西の思想家によって主張されていた。どのような人物が習慣を人間形成上意義あるものとしてどのような思想を展開しているかについては別の機会に論じたいが、例えば、西洋古代では、プラトン、アリストテレス、中国古代では、孔子、孟子を挙げることができる。すでにアリストテレス（古代ギリシアの哲学者、BC384～BC322）は、習慣（エトス・ἔθος）が人格（エートス・ἦθος）に関係することを論じ、『ニコマコス倫理学』第1巻終わりから第2巻にかけて習慣について詳細に論じている。アリストテレスの習慣論を中世において再解釈したのが、トマス・アーキニス（中世の神学者、1224～1248）であった。トマスはこれを habitus 論として検討した。

アウグスティヌス（中世教父の一人、350～430）は自らの青年期の放蕩生活を肉体が欲望に取覆われていたという意味で iron chain（鉄の鎖）（『告白録』第8巻）と述べ、修道院制度の確立者聖ベネディクトゥス（480-547）は、「祈りと労働」の二大モットーを修道士たちの戒律としたことが知られている。モンテーニュ（フランスの思想家、1553～1592）は、「『わたしが今までこれほど長いあいだ慣れ親しんできたことを習慣として行なって、害を受けるはずがない』という意見以上にしっかりと信じているものはない。習慣が、われわれの生活に自分の好みをいくらとんらせてやる。このことについては、習慣は何でもできる。」(中央公論社編、『世
界の名著、モンテーニュ『世界の名著、モンテーニュ』、中央公論社、昭和61年、p.496）と人間形成上の習慣の偉大さについて述べている。

パスカル（フランスの思想家、1623-1662）は『パンセ』に於いて、「川一つで仕切られる滑稽な正義よ。ピレネー山脈のこちら側での真理が、あちら側では誤謬である」（前田陽一・由木康訳、『世界の名著24パスカル』、中央公論社、1990年、187頁）と述べ、場所の相違によって価値観が異なるのは、習慣（慣習）の相違に他ならないことを指摘して、習慣の有する意味を問題視している。

そもそも習慣について多くの論者はどのように捉えているのか。この主題について先にも触れられたClare Carlisle著、On Habit, Routledgeという専門書が2014年に出版されている。以下ではこの書を参考にしながら習慣について各思想家がどのように捉えているか若干紹介したい。

同書によれば、習慣について肯定的に捉える思想家（賛成派）と、習慣について否定的に捉える思想家（反対派）、曖昧な立場（折衷派）をそれぞれ紹介している。

賛成派に属する思想家はアリストテレスをはじめ、ジョセフ・バトラー、フェリックス・ラヴェッソンらがいる。例えばアリストテレスは習慣が道徳生活において核心となる（Clare,2014,p.3）とされ、ヒュームは慣習を人間生活の偉大な導きとしてみなしている（Clare,2014,p.3）。但しヒュームは本文によれば折衷派である。他方ルター、スピノザ、カント、キルケゴール、ベルクソンらの人物は習慣を否定する立場（反対派）に立っている（Clare,2014,pp.1-30）。スピノザは習慣は我々を惑わせることで、習慣を人生において好ましくないものとして捉えている（Clare,2014,p.3）。カント（ドイツの哲学者、1724-1804）も、習慣を我々の内なる道徳的価値を阻害するものであると示唆していたり（Clare,2014,p.3）。習慣によって人間は堕落の可能性があったり自由を奪い去ってしまう恐れがあり、習慣は思考なき反復をもたらす滑稽となってしまい（参考、Clare,2014,p.94 et 97）と考えているようである。さらにカントは習慣と道徳とは両立不可能であるとまで考えてている（参考、Clare,2014,p.103）。このカントに加えベルクソン（デンマークの思想家、1813-1855）は習慣のないことを説き出し、我々の自由を阻害する（Clare,2014,p.122）から理解しているようである。

ヘーゲル（ドイツ思想者の代表者、1770-1831）は、習慣に対する両義性について慎重な態度を取り、「教育は、〜中略〜子供とともに始まり、その子の生涯が本能的状態にあるとき始まるのであって、教育は子供たちに第二の誕生への過程、精神的本性への過程を指し示すのである、その過程は子供たちの本性を第二の本性へと変化させる過程のことであり、この精神的段階を子供に駄染むよう（習慣づけるよう）にするものである」と述べている（Clare,2014,p.103）。

こうした人生における習慣や教育における習慣の意義をめぐっては、肯定的解釈の立場、否定的解釈の立場のいずれもが認められるが、後天的な要素を重視するところが前提である現代の教育学では、習慣を依然として支持する解釈が根深いように思われる。

だが、習慣は人生においてどのような意味があるかと言えば、悪しき習慣や誤った目的に基づく習慣となった場合、それがかえって足枷となって改善しようと思ってももはや習慣づけられているが故に改善困難な点が指摘されることもあるしだれも習慣づけられているが故に改善困難な点が指摘されることもあるし、さらにはどのような内容を習慣づけるのか、習慣化されるのかという内容如何によっては教育上悪影響を及ぼすものもあるため、当然その点は区別して考察する必要がある。

5 習慣と徳目

以上の習慣の理論とともに、それではどのような理念をその習慣の最終的形として目指されていたのか。電子辞書版『広辞苑』では、徳目とは「忠・孝・仁・義など、徳を分類した名目。道徳の細目。儒教では五倫五常を指す」とあり、また『漢字源』では徳目は「仁・義・忠・孝のように、徳を分類した個々の名称。」（1999年、p.356）
とあり、東洋の儒道徳に関する代表的な徳目を意味する傾向があるように思われる。しかし、ここではそのような戦前の徳目主義に続く理念を意図せずして一般的な徳目の分類を意味するものとして徳目という用語を記したい。

6 徳目のリストを考える
徳目とは英語でvirtueとかcardinal virtuesとかと表現され、またGolden rulesは黄金律のことで、行動規範のことでである。ここに1本の論文がある。（Richard T. Kinner, Jerry L. Kernes, Therese M. Daughteribes, ‘A Short List of Universal Moral Values’, Counseling and Values, Vol. 45, 2000, pp. 4-16）は、西洋の徳目のリストについて考察を展開し、簡易な徳目リストの作成に挑戦している。このリストの作成の意義としてこの論文の著者は「最も普遍的に受け入れられた諸価値の簡潔なリストは特定の価値の衝突やモラル・ディレクショニを個々人が把握する際に役立つ一般的なガイドとしてまたはフレームとして役立つであろう」（Kinner et al, 2000, pp. 4-5）と述べている。

ところで、こうした徳目のリスト化の試みは、西洋ではすでにアメリカの思想家ベンジャミン・フランクリン（1706-1790）の提唱する「フランクリン13徳」や、我が国の広瀬淡窓（江戸時代後期の思想家、1782-1856）の「万善簿」、学校教育との関係で指摘するならばパークーケストの「ドルトン・プラン」などが存在しており（cf. 赤井米吉訳、『ドルトン・プランの教育（パーカースト）』、明治図書出版、1974年。）、決して目新しいものではない。また徳目リストの教育での活用については、すでに学校教育では学習指導要領に示された道徳の内容項目は、道徳の授業において取り扱うことが求められていることから、リストとその内容の教育的展開であると捉えることもできる。

この点に関連して先ほど触れたフランクリンは、「生まれながらの性癖や習慣や交友のために陥りがちな過ちは、すべて克服してしまいたいと思った。～中略～私がそれまでに読んだ本には、いろいろの種類の徳が列挙してあったが、その徳目の数を見ると、多いのもあれば少ないものもあった。～中略～そこで私は、当時自分にとって必要であり、また望ましくも思われたすべての徳を十三の名称に含めてしまい、その各々に短い戒律をつけて、～以下略～（フランクリン、松本他訳、『フランクリン全集』、岩波文庫、1957年、pp. 136-137）と最終的に、節制、沈黙、規律、節約、尊厳、勤勉、誠実、正義、中庸、清潔、平和、純潔、謙譲の十三徳目をまとめ上げ、これを手帳に表としてまとめ各週ごとに一つの徳目についてチェックして、13週で一巡してその実践状況を一目瞭然にした表を活用したのであった（フランクリン、1957, pp. 139-141）。

先のキナーらの論文（2000）による興味深い点としては、普遍的価値が存在するかに対して賛成する立場と、普遍的価値が存在するかに対して反対する立場をそれぞれ取り上げている点（Kinner et al, 2000, pp. 5-7）である。それぞれの主張の根拠としては、次の通りである。普遍的価値が存在するかに対して賛成する立場は、我々の内部に普遍的価値が存在することの説明の困難さ、リスクを承知しているものの、普遍的価値が人類の改善や生存に対してなしもう正しい事柄は存在するはずだと論じる立場のことで、ベルはいくらかの普遍的基準がないとすれば、習慣的に執り行われている、あるいはある集団の文化的伝統の部分となっているカニバリズム、身体的拷問、割礼、妻への暴力、子供の摂取、奴隷制度、殺人、ジェノサイドなどを批判する根拠を失うであろう、と述べている（Kinner et al, 2000, p. 6）。

また、普遍的価値が存するとする主唱者は強く価値をアピールすることを指摘している。例えば、黄金律のようなものや嫌悪感を抱かせる忌まわしい実践などを指摘する根拠として（Kinner et al, 2000, p. 6）。

他方、普遍的価値が存在することに対し反対する立場（厳密にいえば、反対する立場も価値を前提として反対しているため、この場合の厳格な定義づけが改めて求

人間形成と習慣—エトスとエートスの関係について考える—
められるかもしれない)は、以下のようないま理由を有している。フォワーズとリチャードソンは、普遍主義は抑圧された文化帝国主義として理解されてもいて(Kinner et al, 2000, p.5)、例として、奴隷制はかつて自然なものとして受容されてきたことを挙げている。諸価値は相対的で主観的であると考えられていたため、ニーチェなどはこの立場に立っているという。例えば、リントンは慎みという抽象概念は、ある意味、普遍的に受容されるかもしれないが、しかし慎みという特定の文脈の記述においては広く変化するものである。よって、慎みのあるべき、という一般的な指示は人がいかにして行動すべきかについて何らまたはほとんど伝えるものではない、という(Kinner et al, 2000, pp.5-6)。

こうした普遍的価値が存在せずとする立場あるいは反対する立場は、20世紀の影響力の有した哲学により採用され(人文主義的心理学、現象学、構成主義)、最終的に20世紀後半を支配してきた多文化運動は、多様性の理想化ゆえに、本質的には反普遍主義者である(Kinner et al, 2000, p.6)。

以上の分類は、教育学では規範的教育学と分析的教育学とのそれぞれの立場と類似している。現代の主流としては、分析的教育学や普遍的価値に対して反対する立場が挙げられる(Kinner et al, 2000, p.6)。これらの立場に立つのは、文化人類学者、分析哲学者などである。文化相対主義や多元主義を支持する思想家たちによっても支持されている。筆者はかつて規範的教育学擁護の立場からこの問題を取り上げたことがある(参考、津田徹「アリストテレスの教育哲学」、『芦屋大学論叢』42号、2005年、pp.85-98)が、今回はこれ以上の踏み込んだ詳細な議論を行う余力はないため、今後の課題としたい。

7 今後にむけて

上記で確認した議論は興味深いものである。教育学では特に近年、理論や知識を身につけることよりも、知識や理論を活用した創意工夫や多様な経験を重んじる傾向や批判的思考といった既存の知識や技術についての反省的・省察的側面が強調されることも少なくなはない。例えば、教科書の内容を理解すること(基礎・基本)は重要であるが、授業で理解した内容を用いて何ができるか(応用)を主眼とするべきであるといった議論がある。

他方で、そうした経験を補う基礎的・基本的知識や技術の習得も重視されていることは言うまでもない。上記で見たように習慣が教育上大きな役割を果たすとともに、もし悪い習慣に染まるなら、それは多くの論者が指摘していたとおり、習慣の否定に繋がりかねないだろう。厳密には習慣のめざす目的が要となり、習慣の力によって人間は大きく成長しうるのであり、不可能だと思われたことも習慣によって達成可能にもなりうる。習慣はそれほど偉大な能力を持ち合わせた自然に備わる強力な方法である。

それゆえ、どのように習慣づけられるのかを教育者は注意深く監視しなければならない。アリストテレスが主張しているように、人間が善くて有徳となるためには、自然[ピュシス]、習慣[エトス]、理性[ロゴス]が必要である(アリストテレス、山本光雄訳、『政治学』、岩波文庫、昭和42年、p.342)。習慣を受け入れる自然本性、そしてよりよき習慣を選択し目指すのが理性である。その意味で悪習に染まらないよう子どもたちに配慮し、この習慣による事物の達成や望ましい習慣化は教育方法として魅力的に思われる。望ましい価値に向けて習慣づけることはある価値を前提として初めて習慣化が可能である。習慣に対する消極的評価についての分析は、筆者が習慣を大いに評価する立場に立ってはいるものの、なおも詳細な検討の余地があると思われる。つまり偶発的な出会いや一度限りの行いがもつ教育的意味は、習慣の教育上の意義を賭めるのだろうか。改めて今後の課題としたい。
「工業教育」の現状と今後に向けて

基礎教育センター 非常勤講師 前田 学

はじめに

現在、各高等学校においては、平成21年3月に告示され、平成25年度から学年進行で実施された高等学校学習指導要領に基づいて高等学校教育が実施されている。今後の新学習指導要領については、幼稚園、小学校、中学校については既に平成29年4月28日に改訂告示され、高等学校については本年度末に告示、平成34年度から次年度で実施予定となっている。

そのような中、工業高校における「工業教育」の現状と今後について述べる。

1 工業高校の現状について

産業構造が変化し、ＩＴ化やＡＩに代表される技術革新がめざましい世の中にある、工業高校生に求められる知識、技術、技能も高度化してきている。また、産業界の多くの職種で技能を持った技術者の不足が課題となっている。老朽化した建物や道路、電気、ガス、水道などのインフラ整備、自動車整備などの社会基盤を支える技術・技能者の育成は急務であり、今後も工業高校の役割は重要と考える。

一方、少子化に重ねて普通科志向による専門高校の定員割れや、高校再編による学校・学級減、地域産業の変化（衰退）による出口の確保、大学など上級学校への進学希望者の増加など、時代の変化への対応に追われている。

平成28年度の文部科学省「学校基本調査」によると高等学校の学科別生徒数の割合は普通科高校で学ぶ生徒が72.9%、専門学科のうち職業を主とする専門学科高校が18.5%（その他の専門学科は除く）、総合学科高校は5.4%となっており、うち工業科に目を向けると、昭和40年代に高校生の18%を占めていた工業高校生が、平成28年度には7.7%に減少している。これからの10年、20年は今まで以上に工業高校をはじめとする高等学校は、大変な時代に入ったと感じる。

2 工業高校生の就職状況について

平成28年度の高等学校卒業生1,075,316人のうち就職者は188,212人で17.5%である。就職者のうち54,285人が工業科の卒業生で全就職者の28.8%を占めている。ちなみに卒業生全体の就職率（就職者の就職希望者に対する割合）は98.0%であり、工業科の就職率は99.4%で、他の職業を主とする専門学科（農業98.7%、商業99.0%、水産98.5%）などに比べて学科別就職率はトップである。

また、工業科における産業別就職状況は、平成28年度工業科卒業生で就職した54,285人中55.8%の30,218人が製造業に就職し、次いで建設業に16.0%の8,686人が就職している。まさに工業高校卒業生就職者の70%以上が製造業・建設業に就職し、日本のものづくりや社会基盤を支える産業に就職している状況にある。

3 工業高校の課題

前述の現状を踏まえて工業高校の課題を挙げると

(1) 工業高校の生徒に求められる資質・能力の変化
産業の高度化・複合化に伴い必要な専門知識や技術が変化していることへの対応。

(2) 生徒の進路の多様化への対応
高等教育機関への進学希望者が増加する一方、高卒時点でその人材確保を希望する企業も存在するため、多様なニーズへの対応。

(3) 地方創生への対応
専門高校等において、地元の地方公共団体や企業等と連携した実践的なプログラムの開発や教育体制の確立により、地域を担う人材育成を促進。

(4) 先端機器の導入および教員の資質の向上
現有の施設設備の老朽化および技術革新による最先端の技術に対応する機器の導入。および教員の専門的な技術・技能の伝承、スキルアップ。

このような課題も抱えているが、工業高校は本物に触れ教育、ものづくりの喜びを与える教育、ものづくりを継承する教育を実践し、ものづくりをとおして人づくりを行うことが工業教育の根幹である。引き続き工業高校は将来のスペシャリストの育成とともに地域産業を担
う専門的職業人の育成に努めなければならない。

４今後に向けて
前述した課題に対応すべく、国の取組等を紹介する。
(1) スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）
社会の変化や産業の動向等に対応した、高度な知識・
技能を身に付け、社会の第一線で活躍できる専門的職業
人を育成するため、先進的な卓越した取組を行う専門高
校（専攻科を含む）を指定し、実践研究を行う。
○実践事例
・愛知県立豊田工業高等学校
平成26年度～28年度の3年間研究指定
テーマ：次世代産業を担うスーパーテクノロジーの育成
研究概要：連携をキーワードに地域の企業や大学の協力の下、豊かな創造性とグローバルな視点を
育成するとともに、実践的な技術力を身に付けた次
世代産業を担うスーパーテクノロジーを育成する。この
プログラムの研究。平成29年度から3年度間指定期間の研究指定校（工業科）
および研究開発課題の一例
・新潟県立新潟工業高等学校
工業技術の向上に資する専門的職業人材育成プログラムの開発
(2) 全国産業教育フェアの開催
専門高校等の生徒の学習成果を総合的に発表する全国
産業教育フェアを、都道府県教育委員会との連携・協力
を得て、全国的な規模で開催することにより、全国の専
門高校等の生徒の学習意欲や産業界、教育界、国民一般
への専門高校等の魅力的な教育内容について理解・関心
を高めるとともに、新たな産業教育の在り方を探り、新
しい時代に即した専門高校等における産業教育の活性化
を図り、その振興に資することを目的とする。
(3) 高等学校学習指導要領の改訂
次の高等学校学習指導要領においては本年度末に告示
予定で、次に示すような改訂内容である。
○安全・安心な社会の構築、職業人としての倫理観、環
境保全やエネルギーの有効な活用、産業のグローバル
競争の激化、情報技術の技術革新の開発が加速すること
などを踏まえ、ものづくりを通して、地域や社会の
健全で持続的な活躍を担う職業人を育成するため、次
のような改善・充実を図る。
・工業の分野で横断的に展開する科目について、知識
や技術及び技能の活用に関する学習の充実
・技術の高度化や情報技術の発展等への対応に関する学
習の充実
・境界問題や省エネルギーに対応した学習の充実
・グローバルな視点を取り入れた学習の充実
・電子機械にに関する知識と技術の活用に関する学習の充
実
・組込み技術について知識と技術の一体的な習得を図る
学習の充実
・耐震技術やユニバーサルデザイン等の知識と技術に関
する学習の充実
おわりに
今年度から、本学で前期に「工業科教育法Ⅰ」を、後
期に「工業科教育法Ⅱ」を担当している。どの教科の教
育法も不変的な内容と時代とともに変化していく内容と
があるが、出来る限り講義内容は最新の情報を取り入れ、
時代の変化に対応できる教員の育成に努めたい。
また、日本のものづくり産業を支えるためにも工業高
校への期待は高まっている。その期待に応えるためにも
教員の育成は不可欠と考える。
引用文献
・工業教育資料 実教出版
「工業教育の方向とこれから」 池守 滋
第369号 平成28年9月 P1-6
「工業教育の活性化に向けて」 後藤 博史
第370号 平成28年11月 P1-6
・平成29年度日本工業教育経営研究会・日本工業技術
学会 近畿支部総会配布資料
文部科学省 持田 雄一 平成29年5月
「工業教育」の現状と今後に向けて
卒業生・学生による報告・記録

この章では、本学を卒業後、学校現場に携わる者2名、教員採用試験に合格した者のうち1名、教育実習を終えた者のうち8名の報告を掲載しています。
神戸芸術工科大学 『教職課程年報2017』

“今”目の前の生徒と向き合って思うこと

2012年度 先端芸術学部 造形表現学科 卒業生
姫路市立琴陵中学校 教諭 西脇 久実

1. 学校概要
昨年度から私が勤務している姫路市立琴陵中学校は、生徒総数約300人の中規模校です。世界遺産姫路城の西側に位置する名古山トンネルの真上にあり、美術室のあるC棟4階の廊下からは、姫路城の天守閣と名古山廟園の仏舎利塔を見ることができます。姫路市が姫路城の東西南北に最初に建てた中学校の内の1つで、70年の歴史と伝統を重んじる学校です。校舎は古いですが、生徒たちが毎日20分間の黙清掃をし、教室や廊下の床など、年中ピカピカ光っています。山の上にあるので、街中でも道路やビルからは離れており、落ち着いて勉強ができる環境の中にあります。

2. 美術授業での実践
1学年3クラスで、3学年と特別支援クラスの計10クラスの美術の授業を担当しています。週に1度しかない美術の授業を、生徒たちは楽しみにしてくれています。私の授業は、実技が7割、鑑賞が3割くらいです。実技の授業は、様々な分野に触れるようにしていますが、長期休暇にポスター課題を出すことから、デザイン画の授業が多くなりがちです。1年生の間にレタリング、色の整理から配色の工夫、色彩構成、デッサンの基本、塑造、ペーパークラフトをやっています。2年生では、平面構成、工芸（ラップシェード）、水墨画、木彫。3年生では、モダニテクニックからの絵画表現、自画像制作、篆刻から持ち手の彫刻をメイン課題としてやっていきます。課題の間に鑑賞の授業から「手本にしてやってみよう」とプリントを使い、20分程度で出来る実技課題を出すこともあります。3年間を通して、全員が美術の授業のどこかで1回はスポットライトが当たるようにしたと考えています。本校は不登校を課題としているので、様々な表現に触れ、自由に発想し創造していく力が、今後の彼らの生きていくヒントに繋がって欲しいという思いもあります。

教科書や資料集に載っている作家を紹介するときもありますが、姫路市立美術館や兵庫県立美術館などで、そのときに出展されている作家や、私の趣味で月刊アートコレクターズを年間購読しているので、そこで私が気になった現代作家を紹介することもあります。芸術を身近に感じて欲しいからです。

プリントの最後には、「ぶたのつぶやき」という欄をつくり、私の主観的な意見や生徒への発問を入れ、鑑賞のヒントになるようにしています。今年、紹介したアーティストの中で、イスラエルのイガル・オゼリという作家がいます。ハイパーリアリスムの画家で写真よりも本物のように女性や自然を描く作家です。彼を紹介した後の授業で自画像制作をしたときに、彼のマネをして細い筆だけを使い着彩している生徒がいたのが印象的でした。アーティストのプリントの他にも2年生では、教科書に載っている日本美術史を学習します。3年生では西洋美術史です。教科書・資料集の年表とリンクするように、PowerPointで自作のスライドをつくったり、またそのスライドとリンクするように、ワークシートをつくります。そのワークシートとは別に、手書きの絵入り補足プリントをつくり、教科書・資料集の年表とリンクするように、ワークシートをつくります。そのワークシートとは別に、手書きの絵入り補足プリントをつくり、美術史に興味を持ってもらえるように、私の主観的な意見や生徒への発問を入れ、鑑賞のヒントになるようにしています。昨年作ったものを今年改良して、今年の講義に感じたことは、来年改良していく予定です。高校で非常勤講師をしていたときは、鑑賞の授業に抵抗を感じていたのですが、鑑賞は、準備すれば準備するほど生徒が食いついてくるし、考えてくれます。そしてなおよりも、
教師自身も深まってくるものだと思うようになりました。社会科の先生から話を聞き、作品の時代背景を勉強し直すことも新しい発見があり面白いです。

3. “今” 目前の生徒と向き合って思うこと

生徒たちの作品は生きてきます。性格がにじみ出てくるし、褒めると伸びるし、褒めすぎると停滞する。指摘する改革されるが、指摘ばかりだと思考がなくなる。まるで生徒1人1人の写し鏡のように。そんな作品を私たち美術教師は点数けさせていかなければならないので、ただ点数をつけ続けるのではなく、生徒1人1人ということを忘れていかないと思っています。また、私の発言や授業内容の反省材料にもしています。1人1人ですが、不思議と学年ごとに色があり、3年生は技術があるが行き当たりばったりで作品をつくる傾向があり、2年生は素帳面でこだわりが強い、1年生はアイディアを引き出すことが得意で大をつくるのがあります。生徒300人の作品を見ることができるのは、とても幸せです。彼らの作品は非常に面白く愛おしいと思います。

講師時代から毎年、卒業前の3年生へ送っている言葉があります。【作品というのは、どんなテーマであっても結局は大切な、連帯感が必要です。どれだけ今を見つめられるか、どれだけの記憶を遡るか、どれだけの先想像ができるか…ゼロのところには何も生まれません。みんなが15年間生きてきて色んな経験をしてたくさん美しいものに触れてきたから造れる作品があります。今回の作品もそう。どの作品も完璧じゃないけど、凄く良い。高校で美術を選択しなければ、もう美術の授業はありませんが、これからもどんな形でもいいので作品をつくっていって欲しいと思います。「変わる」こことは褒め言葉。作品が「普通」と言われたら少しかがりしましょう。そんなアートの世界。絵が上手くなってもいいです。特別な能力がなくてもオッケー。生きていることがアートに繋がり、新しい発見があり新しい発見があり面面白います。】残念ながら、寝ずに準備する言葉は、あまり生徒たちの心にヒットしないようで…

4. 教職を目指す大学生の皆さんへ

私は、高校と中学校しか勤務経験がありませんが、私が会った生徒は皆私と同じくらい可愛いです。きっと皆さんと同じくらい可愛いです。今、目の前にある課題と、しっかり向き合い、ぜひ授業になおして下さい。未来の可愛いかもの生徒たちを思い、「今」を逃さずに、しっかり頑張ってあなたの未来に向いていると思います。実際に生徒を目の前にしたときに、しっかり向き合えるのはそのような人だと思うからです。また、私自身そんな人と一緒に働きたいと思います。

あと気になっていることがあります。生徒に粘土を与えようと、落ち着きがない生徒でも不思議に静かに集中して作業をします。一般的に荒れているとされている学校でもそうなのか…春からそういった学校へ勤務される方は、検証してみてください。
充実感で溢れた公立高校の非常勤講師を経験して

2016年度 デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 卒業生
兵庫県立川西明峰高校 非常勤講師 佐藤根 ぴあの

2017年4月から兵庫県立川西明峰高校で、美術の非常勤講師をさせて頂いております。美術の授業は選択制になっており、1年生4クラス、2年生1クラス、3年生2クラス、1クラス20人前後に美術を教えています。

2016年12月末、大学4年生の時に、川西明峰高校に非常勤講師としてお世話になることが決まりました。教育実習を終えてすぐに11月初旬、就職活動と卒業制作に明け暮れていました。かけがえのない経験となった教育実習でしたが、正直なところ、この時はまだ、先生になろうとは思っていませんでした。12月初めに受けた会社に事務採用で、最終面接まで残りました。しかし、心のどこかで、デザインや美術に関わっていたい、教員免許や学芸員の資格を活かせる職場で働きたいと思っていた、そんな時、川西明峰高校の非常勤講師をやってみないか、というお話を頂きました。自宅と同じ市内に高校があること、週に14時間美術の授業を受持つこと、何より、4年間学んだイラストやデザイン、教員の授業を活かしたお仕事が出来る！と思い、会社の方をお断りしました。

2017年3月、たくさんの人に支えられ、駆け抜けた大学を卒業しました。そして4月から、同じ芸術科の音楽、書道の先生や周りの先生方に助けられながら、美術の先生として生徒の前に立つようになりました。つい半月前まで教壇の前に座っていたのに、急に先生、と呼ばれとなりました。なんだか、くすぐったいような不思議な気持ちでした。何が分からないのかさえ分からない、という不安もありましたが、生徒が近いこともあり、生徒はすぐに打って降りつぶしてくれ、毎日がとても楽しいです。悩んだり、失敗をして落ち込むこともありますが、笑って助けてくれたり、生徒に助けられることばかりです。生徒とコミュニケーションを取ること、生徒の目線に立って話すことを何より大事にしています。授業中も積極的に生徒ひとりひとりと会話をするよう心がけ、廊下等で生徒とすれ違う時も、挨拶や声をかけるようにしています。その甲斐あってか、美術を選択していない生徒も廊下や職員室で話しかけてくれたり、部活動の試合の結果報告や、受験の報告をしてくれます。芸術系の大学へ進学を考えていた生徒には、志望校に合わせた個別の対策を考え、プリントを作りました。様々な理由で進学を悩んでいた生徒もいましたが、わたしの一言が背中を押して生徒の今後の人生を変えただんな、と思うと、うれしい反面、とても重みがあります。

受験の報告や将来の話を聞くと、自分も同じようなことを高校生の時に経験し、悩んでいたことを思い出します。そんな時に、身近な立場で手を差し伸べられる先生という職業は、素敵だなぁと思います。高校の美術は、芸術系の大学や専門学校へ進学しない限り、人生で最後の美術の授業になります。

この先もずっと、生徒ひとりひとりが、ときめきやわくわくする気持ちをずっと持ってきてほしいと強く願っています。そして、表現すること、美術の入口を広く開けておきたい、楽しんで美術の授業に取り組んでもらいたい、そんな気持ちで日々、授業を行っています。

まだまだひょっこり先生1年生という立場ですが、学校から一歩外に出れば、もっと未熟な22歳です。絵を描くことや、大学4年間打ち込んだ音楽活動も続けています。今後も制作、活動を続けていきたいと思っています。非常勤講師は副業が法律で認められています。正直その辺、掛け持ちや副業をしないと経済的に厳しいです。しかし、正規の先生方よりも余裕があるので、採用実験の勉強や、制作、作家活動をすることも可能です。毎日がとても充実していると胸を張って言えます。やりがいがあり、日々、素晴らしい経験をしています。

豊かな心を持った、生徒が話しかけやすい美術の先生を目指したいです。
私は、兵庫県教員採用選考試験を4年生の時に受けました。当時はまだ私も教職か就職かという迷いがあり両方を同時進行で進めていましたが、高校の頃からの夢が諦めきれずに就職活動で内定を得た企業も事情を説明し辞退させて頂き、教職一本に決めました。

私の考えでは正直、卒業後に講師をしながら経験と知識を身につけ数年をかけて本採用の教員になれればという思いだったので今回の教員採用試験は試験自体が一体どういったものなのかを知る機会にしようという意気込みで臨んでいました。対策をしようと思ってもほかの方達と比べると私は経験もなく知識も少ないので藤井教授に相談に行くと、早速スケジュールを確認し授業の合間を縫ってある程度の力をつけられるようにと対策をする時間を設けていただきました。

4月の中旬から時間を決めて一次試験の集団面接と一般教養、二次試験の実技（デッサンと平面構成）と個人面接すべて面倒を見ていただきました。一次試験の一般教養は、先輩方が実際に解いた解答例を参考に、過去問を多数閲覧し間違いを何度も見返し、集団面接の質疑応答なども数回に渡り練習しました。二次試験も120分でデッサンと平面構成の二課題を仕上けなければならず、時間の配分を配慮しつつクオリティの高い作品を仕上げることができることが目指し毎週取り組みました。学科の卒業制作や展示会の準備なども同時進行で進めていたので毎週の試験対策はかなりきつかったのを覚えています。

教授には二次試験での実技を主に全力で指導していただいたのですが、なかなか厳しい言葉や指導が続き、ある休みをしたいという気持ちが常に頭によぎっていましたが、どうしても教授を頼かせられたいという思いで奮闘を続けてきました。駄目と言われたところはとことん直していく、なぜ駄目なのかを必ず聞きくようにして、納得いかない場合は直接教授に鉛筆で書き込んでいました。そうこうしているうちに一次試験の集団面接が始まり、一晩のグループの方は私以外全員現役の講師をしておられる方ばかりだったので、私は教育実習のレベルでしか話ができずに周りの方の現実味を帯びた意見に圧倒されたのを覚えています。試験が終わって帰り道の道中、特別支援学校で常勤講師をしておられる方にお話を伺う時間があったのですが、やはり教育現場は生半可な気持ちでできるものではなく、その責任の重さや自分自身の立場の意味など貴重なお話をたくさん聞くことができました。教授にはまだまだ教育現場に立つことは早すぎるのではないかと改めて感ざわらされました。

しかし、二次の実技試験は先生方に特に時間を割いて特訓していただいた内容だったので、合否に関係なく今年で積み重ねてきた成果をただ全力で出し切るような気持ちで望みました。前日のギリギリまで実技のデッサンと平面構成に取り組み、最後の最後にやって教授から褒められたことが大変嬉しく、頑張ってよかったなと改めて思いいます。当日もプレッシャーに押しつけられそうになりましたが、悔いなく面接と実技を終わらせられました。熱心にご指導いただいた先生方と、今まで一緒に頑張ってきた仲間、支えてくれた友人や家族に心から感謝しています。

晴れて来年の春から教員をさせていただく事がなりましたが、引き続き先生方に絵画、平面、デッサンの授業指導法やその技術の習得、年間指導計画の組立てなど手厚く指導していただいている最中です。現場に一度も立ったことがない私が、これから卒業するまでの約半年間にしてどれほどの知識や技術、思考の幅を広げられるか、ここからが本番だと思っています。

晴れて来年の春から教員をさせていただく事がなりましたが、引き続き先生方に絵画、平面、デッサンの授業指導法やその技術の習得、年間指導計画の組立てなど手厚く指導していただいている最中です。現場に一度も立ったことがない私が、これから卒業するまでの約半年間にしてどれほどの知識や技術、思考の幅を広げられるか、ここからが本番だと思っています。

まだまだ知識や経験は浅いですが、生徒や保護者の方に寄り添うことのできる教員を目指して日々精進していきたいと思います。
デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 4年
大西 咲英

私は中学生の時、高校生の時も大學生の現在も、先生に助けられて来ました。私もそんな存在になりたいという強い憧れだけを持って教育実習に挑みました。

私は2017年5月29日から3週間、明石市立魚住中学校で教育実習をさせていただきました。実習をするあたり一番不安だったのが、中学生と関わる機会が初めてな上に話すことも得意ではなく、コミュニケーション取ることができるのかという授業以前の問題でした。案の定不安は的中し、私が担当するクラスは活発な子どもが多く最初の数日間はあまり話すことができず自分の中居場所が無くオロオロとしていました。そんな私を支えてくれたのもまた先生方でした。

一番印象に残っている先生の言葉があります。クラス担当の先生から、生徒に注意することが出来ていない私が「先生は何があっても一番に生徒を守る存在でなくてはいけない。ある生徒に嫌われたとしても、頑張っている生徒の盾にならなくちゃいけない。」というアドバイスをいただきました。私はこの言葉が深く胸に刺さり、自分は生徒を守る立場であるということを再確認しました。それからはたどたどしくも注意をしたり、毎日慣れないSHRで話したり、それをしっかりと聞いてくれる生徒がたくさん居ました。不慣れで下手な私の授業にもしっかりと挙手をしてたくさんの方に応えてくれました。

教員という仕事は思っていたよりもずっと大変で仕事も多く、いつも生徒のことを考えなくてはならない。しかし非常に大きくなりたいことがあることもまた改めて分かりました。私はこの仕事には向いていないのだろうかとも思いました。しかし実習を終えた今も先生への憧れはさらに強く持ち続けています。その強い気持ちを原動力に生徒を守る盾になる先生になりたいと思いました。

デザイン学部 ビジュアルデザイン学科 4年
酒井 文香

私は中学校に三週間教育実習に行きました。授業の準備段階で悩んだのは、ワークシートの作り方である。ただ手順を描くスペースをつくるだけです生徒に伝わらない。生徒の授業に対するモチベーションをあげたり、興味を引きつけるためにワークシートを作成する作業ではとても重要なことで、実際に板書き手描きの絵や写真を使うと生徒のつくり方が違わうのが良く分かった。私がワークシートを作る上でアドバイスを受け、意識して作ったのは一枚のワークシートを作成させることで、生徒に喜びを与えるような構成になっているか、ワークシートの中でどのように生徒のアイデアをブラッシュアップし、向上させていくかを担当の先生からアドバイスを受けながら何度も練り直していた。

授業を実際に行って驚いたのは、予想以上に個人差が大きいことがありました。美術の得意な生徒や好きな生徒は教室の中で数人はおり、楽々と課題をクリアしてしまうが、教室の中には美術の苦手な生徒や美術の授業で初めて経験することが多い生徒の方が多い。その美術の授業が苦手な生徒をどうサポートして行くか、一度目の授業で改善点を見つけ、次の授業で工夫していった。見本を多く用意したり、資料をいろいろ与え、そこから選ばせるなど工夫を加えて行った。私はユーモアを交えながら生徒と対話し、授業を進めたり、生徒にアドバイスしたり生徒のよい所を見つけ褒めることは得意である。その反面、早口になり、スラスラと授業を進めてしまうのが欠点である。一度言っただけでは理解できないことがある生徒もいる。教室全体に授業内容を伝えるためにには、何度も繰り返し伝え、ゆっくり話し、間の取り方、注目の集め方など、様々な工夫が必要だった。課題を伝えるだけでも多くの場合がある。五十分という限られた時間の中で、課題を伝え、作業し、片付ける。いかに教室全体をまとめるか、考えさせられる教育実習だった。
先端芸術学部 映像表現学科 4年
末木 孝太朗

今回の教育実習を通して様々なことを感じ学ぶことができました。特に教師とはどうあるべきか。実習校でたくさんの先生方とお話しし、授業の様子や生徒と接する姿を見て、改めて教師という立場を考えさせられました。常に生徒を観察し、生徒だけでなく職員とのコミュニケーションが絶えない、学校という小さな社会の中で教師は常に生徒のことを考えている場所であると感じました。また、生徒に授業をする上で、生徒にどんな力を身に着けさせたいのかという点で、自分はただ教えたいから授業をするという内容が目立ちました。

映像やアニメーションを学ぶことで生徒にどんな力が身に着くのかと考えていく必要性を感じることができ、大変勉強になりました。生徒とのコミュニケーションをとる上で、初めは積極的に話しかけてくる生徒が少なく、授業内で何度かコミュニケーションをとるうちに、心を開いて話しかけてくれる生徒が段々と増えていきました。

アニメーションという領域で授業を行いましたが、アニメーション制作を通してアニメーションに興味を持ち、質問をしてくる生徒が増えたことが何よりうれしかったです。コミュニケーションがとれるようになったこと、生徒が楽しく制作をし、興味を持ってくれることが教師の醍醐味ではないかと改めて感じました。

教育実習を通して改めた学んだこと
先端芸術学部 クラフト・美術学科 4年

松浦 優奈

私は兵庫県の中学校で3週間の教育実習を行いました。不安と期待でいっぱいでしたが、3週間はあっという間に過ぎ去りました。短い期間でしたが、学ぶことはたくさんありました。担当教科の先生から教わった「生徒にとってこの50分の授業は人生で一度しかないもの」という言葉です。

教師は複数のクラスに対して授業を行います。もちろん同じ学年であれば同じ単元を教えなければなりません。つまり、同じ内容の授業を繰り返し、複数のクラスに対して行うわけですが、生徒にとってはその授業は1度しかないのです。それを聞いたのは私が初めて生徒の前で授業をした日の放課後のことでした。初めての授業は失敗だらけでした。うまく授業ができなかった悔しさと生徒に対しての申し訳なさが際立ち、その日はひどく落ち込んだのを覚えています。

翌日から私は、どうしたら生徒にとって印象に残る、楽しく面白い授業ができるだろうかと考えるようになりました。他の先生の授業を見学することで、生徒の惹きつける方や黒板の使い方を学びました。生徒と関わることで、授業内のコミュニケーションが取りやすくなりました。自作の教材や参考作品を作ると、授業で使用した際に生徒が「おお、すげぇ！」と興味を持って授業に取り組むようになりました。1つの授業を作るのに先生はどれだけ細密な計画を立てるかを知り、事前準備がいかに大切かを学ぶことができました。

担当したクラスはとても賑やかなクラスで、毎日生徒に会うのがとても楽しみでした。3週間の教育実習は想像していたより大変で、毎日自分の体力との勝負でした。最終日の生徒からのサプライズや、先生方からの励の言葉、寄せ書きに書いてあった先生の授業面白かった！という言葉などを責め、3週間休む暇もなく頑張ってきたと思いました。この経験を生かし、今後も努力し続けようと思います。

先端芸術学部 クラフト・美術学科 4年

森 敦生

私は大阪府松原市にある私立阪南大学高等学校にて2週間の教育実習を行わせていただきました。短くも長く感じられた実習では、大学の授業だけでは学ぶことのできない、実際の教育現場での教育を学ぶことができました。

授業実習では陶芸の授業を担当させていただくことになりました。陶芸は私の専門分野であるため、スムーズに授業を進行させることができるように、うまく生徒に指導できるようと考えていました。しかし、授業実習を振り返ってみると、“生徒の立場になれていたか”“生徒は何に重視させるのか”の大きな反省点が見ええてきました。

私は陶芸の知識と技術が身に付いていますが、生徒に身に付いていません。それにも関わらず、緊張から試技の一部を忘れてしまったり、時間を気にするあまり生徒の制作をあまり見てやることができなくなりました。また、無理のある時間配分であったために、生徒に困らなくても、初心者が生徒の立場になって指導しなければならないことは理解しているつもりでしたが、その本質を全く理解してなかったことを痛感しました。

工芸とはまず技術を身に付けてからであり、それができてからの発想を取り入れた自由なデザインを考えていくべきだと私は思っています。しかし、生徒には自由な発想をしてデザインを考えさせるほうが授業を楽しむことができると考えてしまい、技術より作品のデザインを重視させた授業にしていました。そのため曖昧な授業内容となってしまいました。工芸の授業を行う上での大切なことを欠かしてしまう結果となってしまいました。

授業実習において、指導する上での生徒への配慮不足が目立ってしまいました。また、実際に授業を行うことで、自らの知識と技術を伝え教えるということの難しさを痛感しました。しかしこの経験は、生徒との向き合い方と美術の教師としての在り方を深く考えることができました。

教育実習を通して改めた学んだこと
先端芸術学部 クラフト・美術学科 4年

柳原 萌

私は神戸市にある中高一貫の私立女子校で3週間の教育実習を行いました。
実際授業を行ったのは中学1年生と高校3年生の2学年でした。在籍している生徒のなかで年少と年長の学年で、内容や作業ベースも大きな差があり、中高一貫ならではの貴重な経験をすることが出来ました。

実際教室に向かってみて感じたのは、作業ペースの認識の鈍鈍でした。教師側は少なからず美術が得意であり作業をすることが慣れている、そのため自身が計画する時間で終わらないことを身をもって知りました。生徒の様子を見て、個々のペースを把握し、適切なアドバイスや進め方を臨機応変に考えていかないと授業は成立しない、と思いました。もう一つ感じたのは、活気のあるくらいの授業が効率よく進むということでした。実技が主な授業なので静かに集中させるというより、全員が何か楽しみを見付け、生徒同士で会話しながら技を教え合うような授業が出来ればいいな、と思いました。

担当してくださった指導教諭の受け売りではありますが、美術教師は変わった先生が多い。これを武器に、変わった視点から助言すること、生徒と近くあること、協力してもらって授業を進めていくことが重要なのかなと感じました。

私立ゆえ、私が卒業した頃と教師陣は殆ど変わらず、美術以外の先生方と授業の進め方や今の生徒たちの色や学校の方針、私たちが在学した頃との違いを交えながらお話してくださってとても貴重な経験が出来ました。

教育実習を通して学んだこと

科目等履修生

中川 爱子

母校の佐賀県鹿島市立西部中学校で3週間の教育実習を終えた。西部中学校はやんちゃな生徒が多く、実習が始まる前は不安しかなかった。

最初の1週間目は生徒と会話ができなかったが、週の後半に、時間割や一分を書く学活ノートを任され、私が決めたテーマに生徒が一言書き、それに対してコメントする。一人一人と向き合えるツールになり、最初はあまり書いてくれなかった生徒もだんだんしっかり書いてくれるようになり、読むのが楽しみだった。会話でコミュニケーションが取れない分を、文字で生徒と向き合った。

美術の授業は、生徒にとって休み時間であることが1週目にわたった。実習が苦手な生徒が大半だったため、きちんと授業することよりも、美術とは何かを伝えることにフォーカスした。授業の始めに「絵が苦手な人は、人生の中で何枚作品を残すのか。先絵を描く機会は減っていく。今の描く時間や作品を大切にしてほしい」という話をした。生徒はそつつきが変わり授業を進めるようになっていった。

実習最終日、6限の研究授業が終わり、教室で最後に自分の高校受験の話をした。「嘘だらけで面接に受かったけど、不登校になって転校したけど、今は好きなことができている。何があっても、意外と何かある」話している時、生徒は一言も喋らず、前を向き一生懸命聞いてくれた。一番伝えたいことが伝わったと確信した。

たった3週間で私に何ができるか。私がしたいのは、生徒を正すこともまともな授業をすることもなかった。少しでも、芸術は面白くて感じてほしい。だから毎朝作品を持って行き紹介した。中学の生徒は何もできないと思ってはほしくない。だから、私が失敗した話も含めて、伝えたいことを伝えた。3週間に悔いは残るが、自分が伝えたことば伝えることができ、生徒も受け取ってくれることが何よりも嬉しかった。3週間は、私の人生の中でとても貴重な時間となった。
報告・記録

この章では、本学の教職課程の活動記録、各種統計データを記載しています。
### 2017年度 教職課程履修者数

<table>
<thead>
<tr>
<th>学科名</th>
<th>1年</th>
<th>2年</th>
<th>3年</th>
<th>4年</th>
<th>科目等履修生</th>
<th>就職課程合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>環境デザイン学科 (環境・建築デザイン学科)</td>
<td>5</td>
<td>3</td>
<td>5</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>13</td>
</tr>
<tr>
<td>プロダクト・インテリアデザイン学科 (プロダクトデザイン学科)</td>
<td>10</td>
<td>6</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>21</td>
</tr>
<tr>
<td>ファッションデザイン学科</td>
<td>4</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
</tr>
<tr>
<td>ビジュアルデザイン学科</td>
<td>11</td>
<td>9</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td>28</td>
</tr>
<tr>
<td>まんが表現学科</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>映像表現学科</td>
<td>8</td>
<td>5</td>
<td>0</td>
<td>5</td>
<td>0</td>
<td>18</td>
</tr>
<tr>
<td>アート・クラフト学科 (クラフト・美術学科)</td>
<td>9</td>
<td>9</td>
<td>5</td>
<td>9</td>
<td>1</td>
<td>33</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>51</td>
<td>37</td>
<td>16</td>
<td>25</td>
<td>2</td>
<td>131</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 就職状況の概要 (過去3ヵ年)

<table>
<thead>
<tr>
<th>卒業年度</th>
<th>常勤講師</th>
<th>非常勤講師</th>
<th>その他</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>卒業年度</td>
<td>高等学校</td>
<td>中学校</td>
<td>特別支援学校</td>
<td>高等学校</td>
</tr>
<tr>
<td>2015</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
</tr>
<tr>
<td>2016</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>5</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>2017</td>
<td>1</td>
<td>0</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
<td>9</td>
<td>7</td>
</tr>
</tbody>
</table>

教職課程履修者数／教員採用試験の状況／就職状況の概要
教員免許状一括申請授与件数（過去3ヵ年）

<table>
<thead>
<tr>
<th>学科名</th>
<th>卒業年度</th>
<th>2015</th>
<th>2016</th>
<th>2017</th>
<th>合計</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>環境・建築デザイン学科</td>
<td>高等学校</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>4</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>中学校</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>7</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>高等学校</td>
<td>4</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>その他</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>プロダクトデザイン学科</td>
<td>高等学校</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>中学校</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>高等学校</td>
<td>8</td>
<td>7</td>
<td>4</td>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>その他</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>ファッションデザイン学科</td>
<td>高等学校</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>中学校</td>
<td>5</td>
<td>4</td>
<td>3</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>高等学校</td>
<td>8</td>
<td>7</td>
<td>4</td>
<td>19</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>その他</td>
<td>5</td>
<td>1</td>
<td>3</td>
<td>9</td>
</tr>
<tr>
<td>まんが表現学科</td>
<td>中学校</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>高等学校</td>
<td>0</td>
<td>3</td>
<td>2</td>
<td>5</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>その他</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>映像表現学科</td>
<td>中学校</td>
<td>1</td>
<td>2</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>高等学校</td>
<td>1</td>
<td>4</td>
<td>5</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>その他</td>
<td>0</td>
<td>0</td>
<td>2</td>
<td>2</td>
</tr>
<tr>
<td>クラフト・美術学科</td>
<td>中学校</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>6</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>高等学校</td>
<td>3</td>
<td>3</td>
<td>9</td>
<td>15</td>
</tr>
<tr>
<td>その他</td>
<td>その他</td>
<td>3</td>
<td>1</td>
<td>8</td>
<td>12</td>
</tr>
<tr>
<td>合計</td>
<td></td>
<td>40</td>
<td>44</td>
<td>56</td>
<td>140</td>
</tr>
</tbody>
</table>
# 2017年度 教職課程・博物館学芸員課程運営委員会委員

委員長 津田 徹 基礎教育センター 准教授
副委員長 山﨑 均 基礎教育センター 教授
副委員長 平林 幹生 教務課 課長
桑田 芳治 基礎教育センター 特任教授
藤井 淳一 基礎教育センター 特任教授
福島 美和 基礎教育センター 特任教授
川北 健雄 環境デザイン学科 教授
安森 弘昌 プロダクト・インテリアデザイン学科 准教授
ばんば まさえ ファッションデザイン学科 教授
高 台泳 ビジュアルデザイン学科 助教
橋本 英治 まんが表現学科 教授
金子 照之 映像表現学科 准教授
さくま はな アート・クラフト学科 助教

---

## 2017年度 教職課程・博物館学芸員課程運営委員会の活動記録

<table>
<thead>
<tr>
<th>日 時</th>
<th>主 な 内 容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>第1回 2017年4月18日(火)</td>
<td>2017年度教職課程・博物館学芸員課程運営委員会開催スケジュールについて  &lt;br&gt; 2017年度教職課程にかかる各種業務取り纏め担当について  &lt;br&gt; 2017年度豊能地区教員採用試験における大学推薦者の選考について  &lt;br&gt; 教職関係科目の時間割重複について  &lt;br&gt; 2016年度教員採用状況について  &lt;br&gt; 2016年度教員採用状況の解説について  &lt;br&gt; 2016年度博物館学芸員課程修了者数について  &lt;br&gt; 2017年度教育実習予定者について  &lt;br&gt; 2017年度介護等体験予定者について</td>
</tr>
<tr>
<td>第2回 2017年7月12日(水)</td>
<td>2017年度教職課程・博物館学芸員課程年報の概要と作成スケジュールについて  &lt;br&gt; 2017年度教育実習訪問指導について  &lt;br&gt; 2017年度博物館実習の実施について  &lt;br&gt; 阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会の報告について  &lt;br&gt; 全国私立大学教職課程研究連絡協議会の報告について</td>
</tr>
<tr>
<td>第3回 2017年11月22日(水)</td>
<td>2019年度 教職課程の再課程認定申請について  &lt;br&gt; 「大学独自設定科目」の設定（カリキュラムの構成）  &lt;br&gt; 2018年度 教職課程のカリキュラムについて  &lt;br&gt; 2018年度博物館学芸員課程のカリキュラムについて  &lt;br&gt; 2018年度 教員免許更新講習の実施について  &lt;br&gt; 2017年度 教職課程及び博物館学芸員課程年報の構成について  &lt;br&gt; 2018年度 教員採用実習の実施について  &lt;br&gt; 2018年度 教職課程及び博物館学芸員課程年報の構成について  &lt;br&gt; 2017年度博物館実習実施報告について  &lt;br&gt; 2017年度博物館インターンシップの実施について</td>
</tr>
<tr>
<td>第4回 2018年3月5日(月)</td>
<td>教職課程の再課程認定申請：カリキュラム・教員組織について  &lt;br&gt; 教育実習の履修資格の変更、事前相談実施状況について  &lt;br&gt; 2018年度 教員免許更新講習の認定申請について  &lt;br&gt; 2017年度 教員免許更新講習の認定申請について  &lt;br&gt; 2018年度 教職課程のカリキュラムについて  &lt;br&gt; 2017年度博物館学芸員課程修了者数について  &lt;br&gt; 2018年度 教職課程のカリキュラムについて  &lt;br&gt; 2018年度博物館実習実施報告について  &lt;br&gt; 2018年度博物館学芸員課程修了予定者について</td>
</tr>
</tbody>
</table>

教職課程・博物館学芸員課程運営委員会委員／教職課程・博物館学芸員課程運営委員会の活動記録

---
### 2017年度 教員採用試験対策セミナー実施状況

<table>
<thead>
<tr>
<th>期</th>
<th>日</th>
<th>内 容</th>
<th>担当</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>前</td>
<td>1回</td>
<td>4月15日（土） 教員採用試験に向けて 専門教養（主に美術分野）</td>
<td>藤井</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2回</td>
<td>4月29日（土） 教職教養（一般教養を含む）の要点</td>
<td>津田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3回</td>
<td>5月20日（土） 専門教養（主に工芸分野）の要点</td>
<td>桑田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4回</td>
<td>6月3日（土） 専門教養（主にデザイン分野）・面接の要点</td>
<td>藤井</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5回</td>
<td>6月17日（土） 教員採用試験対策のまとめ</td>
<td>福島</td>
</tr>
<tr>
<td>後</td>
<td>1回</td>
<td>11月4日（土） 教員採用試験に向けて 専門教養（主に美術分野）</td>
<td>藤井</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>2回</td>
<td>11月18日（土） 教職教養（一般教養を含む）の要点</td>
<td>津田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3回</td>
<td>12月2日（土） 専門教養（主に工芸分野）の要点</td>
<td>桑田</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4回</td>
<td>12月23日（土） 専門教養（主にデザイン分野）・面接の要点</td>
<td>藤井</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5回</td>
<td>1月13日（土） 教員採用試験対策のまとめ</td>
<td>福島</td>
</tr>
</tbody>
</table>
『神戸芸術工科大学 教職課程年報』に関する概要

1. ねらい
本学の教職課程における教育・研究活動に資するため、『神戸芸術工科大学 教職課程年報』を設ける。

2. 投稿資格者
① 本学教職課程担当の教職員（専任、特任、非常勤）
② 教職課程教育実習校等の関係者
③ 本学教職課程履修生（科目等履修生を含む）
④ 既卒者（現役教員等）

3. 原稿の構成
① 投稿者からの論文、研究ノート・ルポルタージュ・エッセイ等
② 課程履修生の教育・学修成果の報告
③ 既卒者からのメッセージ
④ 教職課程の年間運営活動の報告
⑤ 教職課程履修者数、免許取得件数
⑥ その他（必要に応じて、教職課程・博物館学芸員課程運営委員会にて審議する）

4. 発行
年度末（毎年3月中旬）に発行する。

5. 編集
教職課程専任教員および事務局教職員とする。
原稿は執筆者本人による責任とする。
原稿形式は、『神戸芸術工科大学紀要』の執筆要項に準ずる。
提出は、完全原稿とする。執筆手続きについては別途定める。

6. 頒布対象者
頒布を希望する本学、教職課程関係者（教員、職員、学生、本学関係者）、関係機関、その他
執筆者
国立国会図書館
本学情報図書館 ※本学情報図書館HPに電子版をアップロードする

7. 発行部数
250部とする（各課程年報の合本印刷とし、履修学生の増減によって調整する）。

8. その他
詳細は別途定める。また、必要に応じて教職課程・博物館学芸員課程運営委員会にて検討する。
2017年度 教職課程編集後記

今年度も教職課程年報を無事発行することができました。教職課程・博物館学芸員課程運営委員会の先生方ならびに執筆をお引き受け下さった方々に御礼申し上げます。今回は教員側からは6名、卒業生からは2名、学部学生からは9名の報告が掲載されました。今年度は非常においお知らせを報告したいと思います。教員採用選考試験に現役で合格した学生が2名誕生しました。この報告以外にも、卒業生4名が合格を果たしたとの報告を受けました。私たち教職担当の専任教員が把握している人数だけで6名の合格者が出ているということは本学始まって以来の快挙です。ぜひ後輩学生においても引き続き健闘を期待します。教職課程の運営に、引き続き教職員一体となって鋭意努力したいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、本冊子編集発行に際して、齊木崇人学長をはじめ、教職課程・博物館学芸員課程運営委員会の先生方、平林幹生教務課長、教務課職員の田中真弓さん、教務課職員の西岡基さんにお世話になりました。編集委員を代表して御礼申し上げます。

津田 徹
基礎教育センター／准教授